
Fate/Je suis inconnu

ピロシキィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / J e s u i s i n c o n n u

【Nコード】

N 2 2 9 6 Z

【作者名】

ピロシキィ

【あらすじ】

どっかの世界の英雄が転生して一般人（自称）として生活していたら、聖杯戦争に巻き込まれました。

ご都合主義、設定に曖昧なところも有り、原作崩壊も含みますので駄目な方はバックでお願いいたします。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

お手柔らかにお願いします。

プロローグ

夢を見た

片田舎にある村で生まれ、
いつか世界を見て回ろうと夢想した幼年の頃

夢を見た

村の近くで拾った剣を只管、振り続けていた少年の頃

夢を見た

何もかもが光に満ち、自信に満ち溢れ
村を飛び出した少年と青年の間の頃

夢を見た

冒険者として駆け出し、己が道を信じ走り抜けた頃

夢を見た

一人、二人と、仲間が増え続け何時しか傭兵団として、
名を馳せていた青年の頃

夢を見た

数多の戦場を駆け、常勝不敗の褒美にと小国の姫を娶った頃

夢を見た

自分が王と成り、王国の栄華を齎した賢王と謳われた晩年の頃

英雄と呼ばれる者達の末路は非業の最期と言われるが、余は如何であつたらうか。

今は病床に臥せる我が身なれど充足感に包まれておる。なれば余は英雄ではないのだらう。

長き道程は想い歸せば一条の光の如し。

我が生涯に意味を成せたか、或いは無価値か。

それは余が死んでから歴史家達が創ること。

多くのものを手にし、そして零れ落ちたが、歩んだ道に後悔など何一つも無く……

余は…いや俺は…最高に愉しい人生であつたと。

さあ、我が物語はここら終りぞ。

「…誰ぞ、我が剣を持って」

もう握る力も残っておらんが、
最期は生涯の戦友と共に往こう。

銘も無き王の剣 よ。

何処かの世界、何処かの国の王がその波瀾に満ちた生涯を終えた。

バイト行かねば

薄手のカーテンより朝日が差込み、ぼやける視界の元、
徐々に意識が覚醒していく。

「……………」

ここ最近、何故か頻繁に妙な夢を見る。

‘妙な夢’という用語弊があるな、あれは記憶だ。

魂に刻まれた前世の記憶。

輪廻転生、三界流転、流転輪廻、転生輪廻

読み方と多少の意味は違えど、人は生と死を繰り返し続ける。

生まれは死に、死には生まれ、その輪を回り続けるという事らしい。

つまり俺が何を云いたいかというと、

俺にはその『前世の記憶』があると。

我が生涯に一片の悔い無し の大往生を遂げた思ったら、

薄ら明るい光だけを感じふわふわとずっと微睡みの中にいる感覚が
今、考えれば一年ほどあったのだろうと思う。

当時は時間の感覚など無かったから、その頃はまだよかった……。

それから徐々に徐々に自我と感覚が出来てきて、いや目覚めてき
て、

あれ、俺もしかして赤ん坊になってる？

気付いてしまっただけからは大いに狼狽えた。

いきなり赤ん坊。いやほんと参った。

口も満足に動かす事も出来ず、言いたいことも言えず泣き喚く。

排泄行為も儘ならない。前世の死ぬ前より酷い。

まさに羞恥。此れほどの屈辱を未だ嘗て味わっただろうか！？
否、前世の生まれた頃も同じようであったろうがその頃の記憶は無いので断じて否である。

暗黒歴史トシテ我が記憶ノ奥底ニ封印ス。

兎に角、『前世の記憶』がある状態で再スタートした訳だが幼少の頃は体が弱かった。

これは俺の推論だが、まだ出来立てホヤホヤの小さな器に九十余年の人生の記憶が、入れば耐えられないだろ。

お猪口にバケツ一杯の水は入りませんよ。という事だ。

俺には自覚が無いというよりは「何かダリイな」位に感じていたんだけど、

生死の境を何度か彷徨っていたらしい。うん良く生きられたな。

お袋さんが「アンタは小さい頃、散々心配かけたんだから、もう今後は心配してやんない」

と中学校に入った頃仰いました。

そして一人息子置いて単身赴任中の我が父上様と遠い地で暮らしている。

……なんて親だ。

まあ無事ここまで育ててくれたんだ何も言うまい。

俺も俺で子供らしくない子供だっただろうから。

よく言えばとても賢い子供、悪く言えば老成していたといえる。

あまり手をかけることは無かった筈だ。

しかし、『前世の記憶』というのは生きていく、成長する過程で弊害になることが多い。

言葉はまあ生まれた頃から何年も聞いてりゃ覚えられる、

若干他の子供と比べると喋れるようになるのが遅かったらしいが。文字は大変だったな。頑張って勉強しましたよ。義務教育有難う。というか教育水準の高さに驚きた。

習慣や風習、文化に文明や伝統的行事に歴史は新鮮の一言だが、前世の概念があるからかなり戸惑いを覚えた。

そして、この世界の歴史を見たとき驚愕した。

世界は違えど人は争うものだ、戦争はあるだろうと思っていた。しかも何度も繰り返すのものだとも分かっていたが、

しかしこの数は異常だ。そもそも世界の人口からして違うが

ここまで戦死者が出るものなのか、それでも未だに世界のどこかで戦争をしているのだ。人とは業の深い生き物だと改めて感じた。

今の一学生である身分の俺が考えても詮無き事だが、

文明というかこの世界の科学というものは非常に恐ろしい。

効率的に大量に人を殺せる兵器とか最もたる物。

兵器じゃなくて生活に密着する科学は超便利だし、

いやもう、テレビやゲームに電気製品全般、俺も今じゃ無くちゃ生活できないが、

自墮落してしまう。

なんて恐ろしいのだ科学とは。

出来れば部屋に引き籠って一日中、

快適な温度に設定された部屋で歴史小説や漫画を読み、

ネットにゲームをして過していたい。

進路希望の紙に「自宅警備員」又は「ニート界の神」と書きたい。

きつと担任葛木あたりに説教食らうだろうが。

いやアイツは何考えてるか分からないから「そうか」の一言でも終わりそうな気もする。

……うん。試してみよう。

ただ葛木がどんな反応を示すのか見ただけ。
自堕落な生活が送れるほどのマネーも無いし、
両親に迷惑をかけるわけにもいかない。

そしてこの世界も見て回りたいという夢がある。

一日あれば地球の裏側までいけるんだ。

前世より時間的には世界は狭い。いろんな国を見て回る。

ほんとにそう考えると、この世界は発達し繁栄するといえるのだ
ろう。

魔法から科学に成り代ったのか、それとも元から魔法という概念な
ど無かったのか。

しかし歴史を見れば魔女狩りや異端審問など、あとは古い文献に妖
術や仙術に忍法など

名前が違えどそれっぽいものがちよくちよく出てくるのだ。

それを題材にした漫画や物語もなかなか面白いし、興味深いところ
もある。

現に前世ほどではないにしろ魔素は存在している。

俺は前者のほうがり得そうだと思う。

もっともこの様な事を言えば「厨二病はもう卒業しろ」などと言わ
れるだろう。

だが、しかし俺の前世は剣と魔法がガチな世界であったのだ。

所謂ファンタジーな世界。ドラ エやエフエ のような世界であり、
人間以外にエルフやドワーフ、獣人 多種族のこつちで言う知的生
命体がいたわけだ。

他にも竜や魔王に精霊なんかも居た。

それがこちらでは御伽話で存在すると言うのは偶然なのか。

もしかしたら俺と同じような存在が何処かに居るのかもしれない。

居ても居なくても世界を見て回り……………。

あれ、なんか思考が完全に深みに嵌っているぞ。

何ゆえここまで深みに嵌った？

……そうそう最近やたらと前世の夢を見るってのが切欠か。

それに最近やたらと身体能力が上がってきている。

成長期つてレベルじゃないですよ最早、人外です。

もともと魔素を体内に取り込み魔法をぶつ放す事も出来たし、取り込んだ魔素で一時的な肉体強化ブーストできたから最初から人外だったかも…。

いやいや、それにしたってここ最近の成長は尋常じゃない。

100mを本気で走れば金メダル確定位だったのが

今じゃ8秒切るし、ブーストつかった日にゃ2秒とか有り得へん。

やった時は思わず乾いた笑いが出たぜ。

もちろん人が居るときは常識の範囲内で運動神経がいくくらいの力しか出してない。

この急成長は夢と関係がありそうなんだが、生憎と相談できる相手が居ないのが現実だ。

「なあ俺さ最近前世の夢頻繁に見るんだけど、何でだと思っ？」

……無理だろ。

心配されるか、苦笑いで済むか、それとも軽蔑された目で見られるか。

都市伝説の黄色い救急車呼ばれるかもしれん。

……どうにも成らないわ、切り替えよう。

おっと変な思考の海に沈んでいたら結構いい時間じゃないか。

そろそろ起きるか。

うっ寒っ。

雪が積もることが無い地域とはいえ冬はやはり寒い。
でもバイトに向かわねば。

仕方ない布団から抜け出すとしよう。

学園は遅刻してもバイトは遅刻しないこれ俺の信条。

ヨッ！勤労学生の鏡っ！

と鏡の前で身嗜みを整えながら馬鹿なことを考えるのであった。

棚卸しをしよう

鉛色の雲が空一面に広がり、吐く息も白く 冬真っ只中。

正月気分も抜け、学生である自分も明日から学園に通わなくては行けない時期だ。

新都で働くスーツ姿の方々を横目で眺め、そんなことを考えながら
一路、

愛車に跨りバイト先へと向かう。

追伸、真冬のバイクはめっちゃ寒い。

バイト先であるコペンハーゲン。レンガ調の建物はお洒落だ。

一言で言えば 酒屋兼居酒屋 であるが、まあ色々とアレな人間が居る場所でもある。

「ちゃーっす」

店内に侵入し適当な挨拶しながら酒屋のエプロン装着して準備完了。さてと、世界をめぐる資金を得るために本日も肉体労働に精を出しますか。

「ああ、おはようナツシー」

この妙な呼び名は俺にあてたものである。

何度言っても直さないの、もう諦めてはいるが、何とかならんのだろうか。

「どもネコさん。今日は棚卸しでいいんですよ？」

この店の一人娘の猫っぽい女性。

音子^{オトコ}という本名を何故か嫌ってネコ呼ばせてる。

穂群原学園に通っていたが、酒がらみで問題起こして自主退学したらしい。

英語教師の藤村と同級生だと言っていた気がする。

「そそ、年末年始と結構売れたからねえ。頼りにしているよ。」

亚麻色の髪を揺らしながら人懐っこい笑顔を向けられ、思わず頬擦りしたくなるが、耐えましよう。

忘年会シーズン、これからは新年会シーズン書き入れ時である事は確かだ。

まあ頑張りますよ。

「アイサー。ほんじゃあ倉庫に籠ってますから何かあれば言ってお下さい」

「うん。エミヤンはもう倉庫に居るから」

「ういー」

ネコさんに後ろ手に振って倉庫へと向かう。

そこには橙色の髪の少年がいる。今の俺も同じく少年か。彼とは中学からの仲となる。

「よう衛宮。男子生徒の敵！ もげる！」

「なんでさー!？」

リア充と俺よりイケメソは滅んでしまえばいいと思う。

コイツは自宅に後輩の可愛い女の子を毎朝毎晩呼んでアハンウフンの関係を一年くらい続けている。
アハンウフンは俺の妄想だが、一つ屋根の下でナニがあってもおかしくないと思う。

偶に登校の時とか二人で居るとこ見たりするし。

アレ？ それって……前日泊って朝二人で登校か？

ウレシ、ハズカシ、アサガエリならぬアサトウコウですか！

ソレなんてエロゲ？ 羨ましすぎる……。

よし、また今度夜飯をたかりにいくという口実の元、邪魔しに行くこ
う。

「……衛宮はシネばいいと思う」

おっとつい口から本音が……。

「だから、なんでさ!？」

「お前などもう知らん！ あっちの棚は俺がやるから在庫表よこせ

！ あと、近々お前の家に晩飯をご馳走になりに行く！」

「はあ？」

きよとんとしてしている衛宮少年の持っている紙を何枚か引ったくりズ
カズ力奥へと歩みを進める。

ちよっと大人気ないな俺も。

新しい生を受けて精神が肉体に引っ張られているのか？

こちらの生活になれて影響を受けているのか、

前世では女の一人や二人でどうということ無かったが、

俺が今チェリーb……もといボーヤだから、か。

何にしる曾孫にあたるような年齢の少年にする態度ではなかったな

反省。

これも『前世の記憶』の弊害だな。

只、衛宮は少タイジリ甲斐があるからな。やめられない。というよりは放置できない存在だ。

コイツの目指してるものはきつと、完璧超人エミヤ、なのだろう。基本、ノー と言えない日本人では無く求められれば快く受ける。または困っている者は見過ごせません。を地でいくのだ。そこに見返りなどを求めていない。

その精神はとても綺麗で素晴らしい。だが、それ故に危うい。衛宮の場合はもう病的というより 呪い に近い。

今のまま、それを続けていく果てに或るのはおそらく……破滅だ。

人とは業深き存在である。

小さな救済と言うのは道端に落ちた小銭であり、人によっては最初こそソレをどうしようか悩むかも知れないが、毎回道端で小銭を見つければ「おっラッキー」と拾い懐へ。

俺なら悩むことなく最初から懐へ入れる。

数日すれば拾ったことすら忘れるかもしれない。

衛宮からの救済が当たり前になり断られる事は無いと麻痺し、慣れる。

良心的な人間ならば 頼る ではなく 依存 で済むだろう。

これが恋人や妻であればお互い不幸になるだろうが、まだいい。

では、良心的ではない人間の場合なら、

便利な道具もしくは都合のいい奴隷となる。

そう 奴隷 である。

彼がそうなった時、人の業深さを見せ付けられ破滅するだろう。彼はきつとそうなってしまつに違いないという確信がある。

だから放つて置けないのだ。

自分の前世の少年時代に似ているが酷く歪んでいる。

真つ直ぐだが、薄っぺらい そんな存在を。

「このリキュールが少ないな、これは店に並べて在庫発注せねば」

衛宮のことを考えながらもちゃんと棚卸している俺つて凄くない？と自画自賛しつつ、一段落ついたので衛宮に目を向ける。

帳簿的なものにチエツクを入れ、店に補充するものは酒の入ったケースを移動させている。

あれ重いなだね。頑張れ少年。腰を痛めて今夜はお預けになつちまうくらいに。

「なあ、^{ヤマナシ}月見里」

^{ヤマナシ}月見里というのは俺の名前で苗字の方である。

「なんだ衛宮？」

「今凄く鋭い視線を感じた気がするんだけど…」

ほほう俺のプレッシャーを感じ取ったと言つのかなかなかやる。

「よく気付いたな！ お前の腰がバツキリ逝つてしまえと願ってた」

グツと親指を突き立てていい笑顔を作る。

「物騒なこと願うなよ!」

「さて、もう少し頑張るか」

衛宮を無視して仕事に戻るとしよう。

「うおい!」

後ろで喚いているような声がしているような気もするが、
アーアー聞こえないっしたら聞こえない。
それからちゃんと棚卸しました。

「エミちゃん、ナツシーお疲れ。はいコレ」

ネコさんが缶コーヒー2本持って倉庫に来た。

「お疲れ様ですネコさん。ありがとう」

「うえーっす」

缶コーヒーの差し入れ受け取り早速飲む俺。
なんだ士郎君は若干お疲れのようじゃないか、ケツ腰の運動ばかり
しているからそうなるんだ。

「もしかして全部終わったの？」

はて？　なんかネコさんの分かり難い表情が、余計分かり難くなっているが、
どうしてだろうか？

「「？」」

え？　なんで？　終らすといけないの？

「あのねエミちゃん。私も言わなかったのは悪かったけど今日全部終らせる、なんて言っていないでしょう？　君はすぐ頑張りすぎるんだから無理しちゃだめよ」

驚愕の新事実！！

「で、でも、月見里ヤマナシも一緒だったから俺一人頑張った訳じゃ……」

「ナツシーは人で在って人に在らず　なんだから彼に合わせちゃだめ」

あれれ？　俺頑張ったのになんか褒められてないよ？

視界が霞むのはどうしてだろうか？　今日の缶コーヒ―はほろ苦しよっぱいな……。

漢、月見里ヤマナシ航　涙は流さねえ！

棚卸しをしよう(後書き)

主人公の名前発覚

昼食にしませんか(前書き)

プロローグ2日目くらい？

昼食にしませんか

冬休みが終わり学園生活が始まり、真冬の寒さが身に染みる今日、この頃。

山と海に囲まれた静かな地方都市は本日は良い天気である。

やはり太陽が出ると気温が暖かく感じられる。

家を出て穂群原学園まで通学路をしばらく歩いていると同じ制服を着た連中が、ちらちら目に付くようになる。

そして登校する生徒の中に見知った姿を見つけ、声をかける。今日は例の後輩と一緒に。おのれ、リア充め。

「よう大将。昨日はお盛んだったのか？ モゲてしまえ！」

「おはよう月見里。お前はそればかりだな」

しかめっ面しながら挨拶を交わす衛宮。

「おはようございませす月見里先輩」

衛宮とは対照的な柔らかな表情の巨乳美少女。

頬がほんのり赤いのは俺の言葉で昨日の情事を思い出したからだろうか？

だが、その初々しさ、それがいい。相変わらず可愛いな。衛宮の友人として一応、挨拶くらいはしてくれる関係だ。

「おはよう、桜嬢」

間桐桜

1年ほど前から毎日衛宮の家に入り浸っている後輩の巨乳美少女だ。大事なことから2回言ったぞ。大は小を兼ねるだ、うん。衛宮いわく、妹のような存在。とのこと。だが、

「鈍感主人公はみんなそう言うんだ。それでいてあとで美味しく頂いちゃうんだ」

俺は断じて信じていない。

この子の反応見りや分かり易い位に行為…じゃなくて好意を衛宮に向けているじゃないか。

気付いてないとは言わせない。気付くと言えば、この子……いや考えすぎか。

「何言ってるんだ？」

「そうだな。俺も大人になって一友人として祝福してやらねばな」

前も言ったがいつまでも嫉妬していても仕方が無い。

「おい！ 月見里。さっきから何を…心配するな衛宮。あの義兄カメの説得なら俺がしてやる！ 主に肉体言語に限るがな」

そう桜嬢には兄がいる。コイツがもう女にモテる。ワカメなのに！ 性格はワカメだからネチヨネチヨしていて、

… 偶に本気で乾燥ワカメにしてやろうかと思う。

でも衛宮はこれから義兄となる奴になかなか色々言えまい。
だから俺が友人として衛宮に代わって話し合いをしてやろうじゃないか！

しばらくは女子に白い目で、見られようが俺は気にしない！

そうと決まればワカメを探しにGOGOGO!!
校舎に向かって走り出した。

「行っちゃいましたね先輩」

「そうだな桜」

「ワカメって何のことでしょうか？」

「… さあな。アイツの考えてる事は俺には一生分からないと思う。

…俺達も行こう」

穂群原学園は今日も平和である。

昼前の授業は空腹との戦いである

89 \ 1877

b y ヤ・マナシワ・タル 伊 17

先生、お腹が、お腹が空きました。

ワカメ探して走り回ったのがいけなかった。

あと後ろから不意打ちのボー・アンド・アロー・バックブリーカーで体力使った。

超成長してるの忘れてて危うくワカメが帰らぬ人となるどころだったが、まあ満足した。

きつと今日一日くらい保健室だな。

ぐうっと腹の虫が鳴り、空腹に身悶える。

授業中に学食へ行ける筈も無く、

いや一度やったが英語教師の藤村タイガーに捕まり、職員室へ連行された。

そこで言い負かせて、脱出を試みたら場所が悪かった。

職員室である。

周りは教師ばかりで援軍は居なかった。

周りの教師に超睨まれた。気配を消しても脱出不可能だっただろうな。

藤村タイガーは涙を浮かべて教頭に泣き付くし教頭は教頭で

生徒に言い負かされるとは何事かと藤村タイガー叱咤してカオス空間が誕生した。

その後、何故か校長に藤村タイガーと俺が怒られると言う展開で幕を閉じたが。

いい思い出と言つことにしておこう。

「Could you recommend a nice restaurant near here? ハイ!! ここ月見里^{ヤマナシ}君。さあ立って日本語訳してみよう! 先生さつきからポーっとしているの知ってるんだからね!」

いきなり俺を指名する藤村タイガー。何故か偉そうにえっへんと胸を逸らす藤村タイガー。

あんた歳いくつだよ? 俺は前世入れると100超えてるがな。

そんな態度だから親しみ易いもとい舐められるのだ。

……主に俺から。

「ココらでうまい飯屋はござらんか になります。 ポイントは学習などではないのでteachじゃなくてrecommendを使うとこととdeliciousじゃなくてniceを使うところがナイスですね」

訳は多少雑だが許容範囲だろ。

あ、俺トップとは言わないが成績いいほうなのだ。

「うう……」

「座つても？」

フツ、勝った。またつまらぬ虎を泣かせてしまった。

藤村タイガー若干涙目だぜ。

「むぐぐぐつ……」

タイガーが悔しそうに唸っているが無視だ。

腹減ったなあ。何かで気を逸らせぬものだろうか。机に突っ伏しながら考える。

……。

……。

……窓の外を眺めていると隣の席の三枝と目が合う。

三枝の席は窓際であり、窓の外を見るには自然と三枝の方を見なきやならないのだが。

「……っ」

あ、目逸らされた。この照れ屋さんめ。

三枝由紀香さえきゆきか華奢な女の子。

可愛らしい顔立ちというか笑顔がなんか癒されるんだよな。性格はおおらかで、物静か。

地味が悪いとはいわないがクラスで取り分け目立つ存在ではない。

…そう思っていた。席替えで隣になるまでこんな子居たか？ と感じたくらいだ。

…ゴメンな三枝。

でも、よくよく観察してみれば、必要最低限を除いて、

どうやら女子の中でそれとなく三枝を男と接触させないでいる。

人生経験でいけば、百を超えていると言うのに女子おんなこの考えは全く分かん。

いつも同じ部活の3人で行動しているのを見かける。

そういえば、偶に三枝は遠坂凜に何か話しかけて凹んでるよな？

とあさかりん
遠坂凜

穂群原学園に通う生徒なら誰しもその名前を知っている。

容姿端麗・才色兼備・高嶺の花・優雅なお嬢様・学園のアイドル・

胸は将来に期待 e t c … など、

美辞麗句を並び立ててればまだまだ出てくるだろう。

それほどの有名人。

男女問わず人気がある優等生。確かに美少女だが、根からの悪人じやないだろうが、

なんか腹黒そうなのがするし一度ボロボロにされたし、俺は近寄り
がたいのだ。

というより彼女、魔法使いだろうし。

通常、魔法使いとは30歳まで純潔を守ってこそなれる崇高な職業
だが、

女性の場合は魔法処：ゲフン、魔法少女になるのだろうか？

……話が逸れた。

一先ず、都市伝説は置いておくとして。

何故、遠坂凜が魔法使いだと思うのか。

この世界の人間と言うのは基本、魔力というものを認識していない。
稀に無意識に魔力をコントロールしている者もいるが、そういう連
中って大抵、

有名なスポーツ選手や格闘家だったりする。

長年の鍛錬において肉体強化の魔法を自然に身に着けている。

もちろんちゃんとした物ではないから魔法と言いつても難しい代物だが。

衛宮は、この類に思える。

で、一般人は魔力があっても何も起きない。

だが、それでもソレは在ってそれぞれの形があるのだ。

遠坂凜の場合、あきらかに異質。

魔法使いは万物の気配を知る。

『前世』で俺に魔法を覚えてくれた人の言葉だ。

この場合の気配とは色や匂いや数字、の事を指す。

感じ方はそれぞれ違うらしいが俺の場合、匂いだ。

多かれ少なかれ人は魔力と言うものがある。

それを俺は匂いで感じ取る。

遠坂凜は無味無臭。

意図的に隠蔽しているとしたか思えない。

一度、隠蔽しているのか、すっげえ魔力量が少ないから感じないのか

分からなくて、告白かましてドサクサで抱きついた事がある。

……あの時の俺は若かった。

そしてボコボコにされた。

……あれはきつと中国拳法。

だがしかし、素直にやられる俺ではない。
意識が途絶える瞬間俺は見た！

……白だった

そんな訳で遠坂は意図的に隠蔽している事が判明したわけだ。
だが、奴には聞けない。
何故なら身の危険を感じるから、

「俺も魔法使えるんだ、あと前世の違う世界の記憶もあるんだぜ！」

「そう、じゃあ解剖させて？」

ほら、人体実験されそうで怖いじゃない。

アイツから見ると俺は魔法が使える才能がある奴。
その程度の認識でいてもらいたい。

ほんと怖いから……。

「そ、そんなに…見つめないで下さい」

空腹から意識を逸らさせる為に思考の海にダイブしていたら、

三枝が恥かしそうにか細い声で囁いた。

癒されるわあ〜。

こつこつ子お嫁さんにしたいタイプだよな。

「や、月見里くん」

「三枝はかわいいいなー」

机に顔を載せたまま呟く。

というかずつとこの体勢だったんだな。

首が痛くなってきた。そろそろ空腹が限界です。

「…っ！！」

あらま、ほんま初心な子じゃ。
あまり弄るのも可哀相なのでこれくらいにしておいて

「じゃあ今日はここまで、日直さん号令」

やったチャイムなった！！

「起立 礼」

藤村タイガーが出て行くときに俺に向かって「おぼえてるよー！」
と言って

出て行ったが気にすることじゃない。それより飯だ。

「なあ月見里」

「何か用か？ 美綴。俺はこれからバーベキューなんだが」

「ああ、学食かいそりゃ悪いね。でもちよっと待ちな」

美綴綾子^{みづじり あやこ}クラスメイトで弓道部主将。

サバサバした性格の美少女で、薙刀を初めとして数々の武道の達人らしい。

美人は武道をしていなければならぬ、と言っていたがどうなのその信条。

「間桐のことなら、反省もしていないが後悔もしていない」

「間桐？ あんた慎二の奴に何かしたのかい？」

え、ワカメのことじゃないのかよ。

ワカメも弓道部だし。

「心配するな覆面は被ったし、後ろから殺ったから面は割れてないハズ」

「答えになってないじゃないか、ていうかいつも物騒なんだよアンタは」

はあっとこめかみ押さえて溜息つく美綴。

「じゃあ、そういうことだから」

早く学食に行かねば空腹で倒れてしまう。

「私の用件が済んでないよ、まったく」

「じゃあ早くしてくれ hurry! hurry! あ、ちなみに弓道部のお誘いならノーサンキューです」

「衛宮といいアンタといいどうして、そう才能あるのに……」

弓道部のお誘いというのは、これは1年の時に体験入部の際、衛宮は会心出しまくって、俺は矢を三本番えて的に当ててたからだ。衛宮はその後入部したが怪我して辞めたんだっけ。

俺はワールドワイドの漢になるための資金集め、部活よりバイトを選んだから。

美綴は衛宮を部に戻そうと、俺を入部させようと未だ画策している

わけだ。

「じゃあ今度こそ、そういうことで！」

話は終わった。財布の中身を確認。OKいける！

「だから待ちな。私の用件はそのことじゃないよっ！」

「おのれ美綴！ 兵糧攻めかつ！ この鬼畜っ！」

「落ち着け月見里！ すぐ終わるから聞け！」

「嫌だっ！ 何を食っても肉の味がする樂園に俺は行くのだ！！」

「あ、あの、よ、良かったら、お弁当多く作ってきちゃったので食べ……ますか？」

な、ん……だと？！

今まで空気と化していた三枝が驚愕の一言。

全俺が泣いた。

この後、弁当は航が美味しくいただきました。

結局のところ美綴の用件とは

遠坂が今日休みだからアンタ何か知らないかと言っことらしい。知る訳ないじゃん！ っていうか居ない事自体、今知ったわ！ 何で俺にそんなこと聞くんだけ……。

それよりも三枝が多く作った弁当はもともと遠坂と一緒に食べようと作ってきたものであった、複雑な気分だ。

フラグが立ったと思ったのにチクショー！

昼食にしませんか（後書き）

主人公は魔術と魔法の違いがわかってません。
魔力を使うものが全部魔法と言う解釈。

召喚してみる(前書き)

士郎君はランサーと追いかけてっここ中

召喚してみる

今日も今日とて学校ですたい。

何でバイク通学禁止やねん。

だから歩いて登校です。

何時もより早く家を出てしまった為か、まだ通学している生徒は疎らだ。

三枝の弁当旨かったな……。

昨日、ほんのり甘い昼食タイムだったのを思い出す。
今日もそれを味わえると思うほど夢見る少年じゃない。

あわよくば、……いや、やめよう。現実はいつも残酷だ。

……いいじゃないか俺、学食嫌いじゃないし。

穂群原学園の学食。

大雑把な味付け故に女子には受けが良くない。

というより、「なに食べても肉の味しかしねえ」とは誰の言葉だったか……。
まさしくその通りなのだが、俺は好きだ。たまに胸やけするけど。

パチッ

「ぐっ、痛っ」

校門を抜ける時に静電気というには温い、体中に電気が走る感覚を覚える。

思わず立ち眩みに似た症状が出てふらつく。

うっ、手を膝に付き深呼吸する。

おいおい……、本気がよ……。

昨日までは感じなかった圧倒的な違和感。

まるで凶悪な魔物が大きな口を開けて待っているような、不快感が襲ってくる。

結界。まだ発動していないが発動させちゃならねえ類の。

こんな物騒なものを仕掛けた人物は一体何を考えている。

いや、そもそもこの大結界と読んでもいい代物を一人が作ったのだろうか？

しかも一日で。

……遠坂か？

確かに今の頭の中の情報だと一番、黒だ。
アイツ以外魔法使える奴知らない。

しかし理由は？

愚民どもよ我が前に跪け 的……。
昨日、新都のビルの屋上で下界を見下していたし。
学園休んでまでする様な事だろうか。

それが準備の為なら？

無理だ。数時間で作れるような物じゃねえ。

何人かで何週間かかるような代物。

新都のビルに行く意味も無い。

本気であるなら朝一から学園で作業に勤しむ。

いや、待てよ、それはあくまで俺の『前世の常識』ではないのか？

こちらの世界の魔法師はこれくらい当たり前前にやってのけるとい
うことか…。

それだと俺はもう、お手上げだな。

しかし前世ほどでは無いが、それなりに体も鍛えてるし、

魔法も簡単なものなら扱えるし、多少の耐性も備えている。

やり方によっては、或いは…。

だが、これほどの結界を数時間程度で作り上げることの出来る人物
と勝負して勝算は？

一体どれほどの威力の魔法を放ってくるのか、背筋に嫌な汗が流れ
る。

ならばこの件は放置し、安全なところに避難するか？

巫山戯んなつ！　こんな大規模撲滅イカレ結界放置なんぞ出来るか！
誰だか知らないが上等っ！　売られた喧嘩は買ってやるぜ！

うしっ、そうと決まれば授業サボって結界に嫌がらせしてくれようぞ。

あと、遠坂の様子も探らねばならんし…、

しまった！

もし犯人が遠坂の場合、結界が出来たその日から教室に居ないじゃ、気付かれたと警戒され、かなり怪しまれる。

その逆もだ、遠坂が犯人じゃない場合でも、

この結界の存在に気付く　誰がやった？　今日、朝から俺が居ない。

アイツ魔法の才能がある。　怪しい

作戦変更。　一時限目は出席して遠坂の様子見。
それによって取る行動を考えよう。

「むっ、どうした月見里？」

「…柳洞か。急に立眩みがな。どうやら体調が悪いようだ」

「鬼の霍乱とは、よもや珍しいこともあるものだ」

我が学園の生徒会長。柳洞寺の坊主の倅。
真面目でいい奴なのだが奈何せん真面目すぎである。
将来ハゲそう。あつ、どうせ坊主になるから関係ないか。

「酷い言われ様だ。心配しやが…れ…?」

「どうした?」

「すまんが肩を貸してくれ」

「む、大丈夫か? このまま保健室に行くか」

柳洞の肩を借りながら歩き始める。

「…いや、教室でいい。座って休めば落ち着くだろう」

「そうか、だが無理はするな?」

やはりな。柳洞に魔力的な干渉が見られるおそらく暗示の類。
こちらでも干渉させてもらおう。発動条件は分らんが、
行為の上書きなら…よし、いける!

「…ああ。そうだな。ところで最近何か変わった事とかなかったか?」

なるほど、発動すると相手を殺めると。こらまた陰湿な暗示だ。

「いや、取り分け無い。ああ、親父殿が偶には禅を組みに来いとは言っておった」

「はは、そうか。宜しく言っといてくれ」

他愛の無い会話を続けつつ上書きするって結構疲れる。

しかし、誰がこんなものを？ 随分とタイピングがいい。

結界のほうと同一人物、少なくとも何らかの関わりはあるよなあ。

「うむ」

よし、上書きうまくいった。発動すると……くくく……。

発動しないことを祈ろう柳洞の為にも。

昼休み

一時限目、案の定に遠坂は俺を疑いの目で見ていたが、

朝、柳洞の肩を借りて来た事や、体調が悪そうに装っていたから、

結界のせいで体調悪くなったと思ってくれたらしく、

とりあえずの警戒を解いたっばい。

俺もなかなかの演技力だったし、本気で心配してくれた三枝にちよ

っと萌えたのは内緒。

これでも小国の王をしていた身ぞ。腹芸一つや二つどつどつと言つ事無

いわ。

というわけで、次の授業から保健室に行くと言うことにして、学園内を探索。

結界の基点を何箇所か見つけてちよいちよいと嫌がらせの上書を施し、

最後に、屋上に見つけたこの基点に俺の執念を込めた盛大な嫌がらせを書き終えたところだ。

真冬の屋上になんか人が来ないから結構派手に出来ましたよ。

ふっ。いい汗かいたぜ。疲労感がツパネエ。

まあ、出来る限りはやったが消すことは俺の腕じゃやっぱり無理だったが、

しかし、しばらくは発動できまい。

その間に出来ること考えねばな、帰って使い魔でも召喚してみるか。文字通り猫の手も借りたいくらいだしな。俺一人じゃ監視も儘ならん。

でも今は疲れたから、保健室で寝よ。

そして夕方、自宅。

保健医に叩き起こされ自宅へ帰還してきた。
なんでも6時までには完全下校になったらしい。
最近物騒だからだっけさ。

…知ってる、あんな結界あるしな。

というわけで、人手が足りないので使い魔を召喚したいと思います。
召喚した使い魔を放って情報収集に勤しみ現状把握というわけだ。

その為に帰り道、文具屋で大きな紙を購入してきた。

Q 何に使ったの？

A 魔法陣を描く為です。

我が家は築7年 木造2階建て 普通の家です。
床や畳、壁に描ける訳無い。

描いたら父上と母上に追い出されるかもしれないじゃないか。
父上様に限っては息巻いて家建てたのに転勤で1年と我が家で暮ら
していない。

ちよつと残念な人なんだ。

だから、なるべく綺麗に保っておかないと可哀相じゃん。

さてじゃあ、やるか。

使い魔の召喚 3分クッキング風

用意するもの

- ・ 大きい紙 一枚
- ・ 自分の血 適量
- ・ 水性絵具（紫）
- ・ 魔力 適量

場所は自分の精神が一番落ち着けるところがいいでしょう。

今回は自分の部屋です。

- ・ 先ず初めに水性絵具と自分の血を溶いていきます。

絵具の色に関してはお好きな色でどうぞ。

今回の色は量が大変余っていたので使用したままでです。

- ・次に溶いたものを使用して白い紙に魔方陣を描いていきます。

この時のポイントは魔力を流しながら行ってくださいね。
多すぎても少なすぎても紙が破れてしまいますから気をつけましょ
う。

- ・完成した魔法陣をしばらく放置して自然に乾かします。

ドライヤーなどを使用して乾かそうとするとドライヤーの風で、
滲んだり、崩れたりしますのでお勧めできません。

- ・乾いた魔法陣の真ん中に手を置いて再び魔力を流し込みます。

ここでも今回使用した紙はデリケートなので、
あまり魔力を流し込み過ぎないようにしましょう。

- ・最後に呪文です。

「我が呼びかけに応じ来るモノは我が血肉を代価として与えん」

今回の詠唱呪文に 血肉を代価 とありましたが、実際に血や体の一部

を与えなくても大丈夫なので安心しましょう。

今回の召喚はあくまで小動物的なものを想定しているためです。

悪魔や精霊の場合は文字通り、ご自身の血肉または魂など必要な場合があります。

「来たれ我が手足となる下僕よ！」

・魔法陣が強い光を発して何か手応えがあれば成功です。

今回の『使い魔の召喚』は魔法入門2月号にも掲載されています。それでは、また。

閃光と紫電が魔法陣から発せられ徐々に収まりを見せていく。

「……………なんでさー！」

おっと思わず衛宮の口調が移ってしまった。

落ち着け、これは果たして成功したと言えるのか？

生物じゃなくて無機物だと！？　しかしこの慣れ親しんだ重みと手触り。

本当に懐かしい。

まさしくそれは　剣　だった。

暫く混乱と懐かしさが混じりあった思考が落ち着き、冷静になってきた。

全然意味が分からん。

自由に出現させたり、消したり出来るのは便利だが…、どうしろと？

ふう腹減ったな、衛宮の家に晩飯たかりいこう。

深く考えるのを放棄した。

召喚してみる(後書き)

ストックはもうない

青いタイツの男(前書き)

せいばあさんはけいわいだとおもつ byわたる

青いタイトルの男

皆さん、こんばんわ。

衛宮さん宅へ晩御飯を頂戴しに参ったわけですが、家主が ガシャンという盛大な音と共に窓を突き破って出てきました。

また、その窓から青いタイトルの男性が赤い棒もって出てきて、衛宮君を蹴り飛ばしました。

こついう場合はどう反応するのが正解でしょうか？

つて馬鹿あー！ー！！ 落ち着いてる場合かつ！！

止める止める！！

アイツはヤバイ。ヤバ過ぎる。

動きもそうだが殺気が人間のそれと次元が違う。

衛宮を助ける！ と自分に喝を入れる。

トクンっと一瞬脈打つ鼓動を感じ、一気に衛宮へと駆ける。

「やめるおおおお！！」

だが、僅かに遅かった。いつも以上に疾く駆けたにも関わらず、青タイトルの蹴りが再び衛宮を襲い、それを喰らった衛宮は土蔵へと

姿を消した。

「チツ、小僧の知り合いか？」

良かった。土倉を背に青タイトの前に滑り込んだので、衛宮の姿は確認できないが生きている。ダメージは負っているだろうが、

致命傷と言つほどのものは無さそうだと気配で感じ取る。

「……」

「フンツ、まあいい何者か知らねえが死んでもらうぜ」

「随分とお喋りな暗殺者のようだ。口を動かす暇があれば、先ずは得物を動かすべきだ。それとも貴様の得物は飾りか？」

久しぶりだ。一瞬でも気を抜けば命を刈られるような緊張感。だが、それと同時にとてつもない高揚感。自然と頬の筋肉が釣りあがっていく。

「小僧つつ！！ その物言い地獄で詫びろツツ！」

色々考えるのは後回しだ。今は目の前の危機を乗り切るのが先決。

「… Ouvrez」

生涯の相棒よ。今一時、再び共に参ろうぞ。

「なにつ！？」

ランサーは驚愕の表情を浮かべた。
放たれた高速の突きを弾いた目の前の男。
一撃で仕留められるハズだった。

そう、ハズだった…。なのだ。

実際に今も目の前の男は健在。そして握られたる武骨な剣。

ランサーは驚愕を止め、2度、3度、4度、と己が槍を振るい突く。

その繰り出す攻撃回数を増やしていく。

だがどうだ、目の前の男はそれをまた凌いで見せた。

さつきまでの雰囲気とはまるで別もの。

いや、最初の物言いのところから感じた僅かな違和感。

只の人間がサーヴァントの重圧を受けて、顔色一つ変えずに減らず口を叩けるのか？

今、それはさらに大きくなり、一つの疑問となる。

「…貴様、セイバーか」

「さてな。セイバーという物が軍刀を指すなら違つと答えよう」

男は若干、眉を顰めた後に答えた。

本当に知らないのか？ それとも挑発しているのか？

「……………」

あまりに不可解なこの状況にランサーも迂闊に手を出すことを躊躇った。

その時、男の後ろの建物、先ほど蹴り飛ばした少年が突っ込んだ場所から光が零れた。

次の瞬間、目の前の男が吹き飛ばされた。

そして次はランサーの番だった。

咄嗟に槍を盾に防いだが、後ろに後退させられた。

「今度こそ本物か……。よう……」

突如現れた銀の鎧を纏った黄金色の髪の少女。そして自分を吹き飛ばした張本人。

武器は持っていないがどんなトリックだ？

と内心考えながらもランサーは不敵に少女に語りかけた。

ワタルです。

さっきまで戦闘していたら急に後ろから現れた何者が盛大に吹き飛ばされたのです。

僕が何をしたと言うんですか、全身が軋んでいるとです。

「くそっ、ブーストがかかってなかったら完全に逝ってたな」

土蔵の方から突如として感じたプレッシャー。
飛び出してきた銀色が斬りつけてきたがギリギリ剣を体との間に滑り込ませ、
防御に成功したものの、一瞬だが闇に落ちた。

暗転した視界が戻れば自分が地面に這い蹲っている事に気付く。
立ち上がり周囲を見回せば、さっきの青タイツと凜々しい表情の少女が戦っている。

「何がどうなってるんだ？」

考えるに、俺をゴルフボールよろしくフルスイングしてくれちゃったのは、

…あの女の子だろう。

情報が少ないのでどちらかに加勢するかどうかも悩む。
普通に考えれば今まで命の取り合いをしていた相手より
女の子の方に付くべきなのだろうが。

…俺をいきなり斬り飛ばしてくれた相手だ。

とても友好的だとは思えん。

俺が思考している間にも騎士風少女と青タイツは化け物染みた戦闘を繰り返している。

「どうしたランサー、止まっただけでは槍兵の名が泣こう。そちらが

来ないのなら私が行くが」

「……は、わざわざ死に来るか。それは構わんが一つ聞かせろ。貴様の宝具　それは剣か？」

なるほど、少女の手には何か握られている。

それが武器と言いつことは分かるが、……風を纏って不可視にしているのか？

「さあどうかな、戦斧かもしれぬし、槍剣かもしれぬ。いや、もしかしたら弓ということもあるかもしれぬぞ、ランサー？」

「はっ、ぬかせ剣使い」

ああ、やはり剣か。前の生涯を通して聖剣や魔剣を何度か見たことがあるが、

あれはそういった類のもの。そしてあの輝きからして前者。

きっと強力な呪符は持ち主に栄光や勝利を齎すのだろう。

だが、誤れば破滅も齎す。

その巨大な力ゆえに、どんな聖者だろうか力に溺れる事がある。

そして破滅。

俺は何度か手にする機会はあるけど其れを持つことは生涯一度も無かった。

力に溺れることを恐れたのだ。

俺は自身が俗物である事を重々承知していたから、

それでも信じていた。

聖剣になど頼らずに己が往く道末を。

だが今は如何でもいいこと。

「ついでにもう一つ訊くがな。お互い初見だしよ、ここらで分けて気はないか？」

「……………」

「悪い話じゃないねえろう？ あそこで惚けているお前のマスターは使い物にならないし、俺のマスターも姿を見せない腰ぬけときた。そして変な奴までいやがる。ここはお互い、万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが」

変なやつだ、と？ 何処だ？！ あ、俺か。

失礼な発言ではあるが、そこは流そうじゃないか俺は空気読める男。そして、青タイツの言っている事大いに賛成なのだが…。

あつ、衛宮だ。良かった大丈夫そうだな。

「断る。貴方はここで倒れる、ランサー」

えっ！？ 断るの？！

「そうかよ。つたく、こつちは元々様子見が目的だったんだぜ？ サーヴァントが出たとあつちや長居する気は無かつたんだが」

「

急激に空気が変わった。二人の周囲の空気いや青タイトスの周囲が歪む。

そしてランサーと呼ばれた青タイトスの姿勢が低くなる。

「宝具！」

騎士風少女は不可視の剣を構え直した。

「……………じゃあな。その心臓、貰い受ける！」

青タイトスからとんでもない魔力が噴出し、

俺に向けられた物でもないのに背中がゾクリと凍る。手に持つ槍は彼女の足元めがけて繰り出される。

だが、解せない。

と思う同時に体が動き出してしまった。

「sortie jusqu' ?」

疾いっ！ が、何故、足元を狙う必要がある？

あれでは避けて下さいといってるようなもの。青タイトスといランサーの槍が赤く光り、

「刺し穿つ（ゲイ）」

案の定、騎士風少女は避けて上から切り伏せようとしている。

まにあええええー！！！！！！

「
” 死棘ボルクの槍！”」

下段より放たれた槍は、その軌道を変え少女の心臓に向かっていた。

「チエストオオオオ

！！！！」

渾身の魔力を込めて放った航の斬撃波はランサーの放った槍先を捕らえ、

セイバーの本来であれば貫かれるはずの心臓の軌道を逸らす事に成功した。

もともと彼女の直感でギリギリのところまで其れを避けていたのだが、二つが重なったことでセイバーの概念武装を少しばかり傷付ける事で、

事なきを得た。

ただ、セイバーはその衝撃ゆえに後方に大分飛ばされてしまったが。

「呪詛…、いや今のは因果の逆転か」

着地と同時に呟くセイバーに対して

「テムエ……ッ。邪魔したな我が必殺の刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ホルクを」

かなりの怒りを孕ませた顔のランサー。

両者の中間に位置取り、剣を肩に担いだ男は不敵に笑う。

「いささか無粋な、青いの。女は愛でる者ぞ。真心と情熱を込めて心射止めるといふならば邪魔はせんが、そのまま心臓貫こうとは、我が前では見過ごせんな。…セタンタ君？」

「チツ、まずったぜ。今日はここで退かせて貰う」

かなり怒気を秘めながらもランサーは踵を返す。

「逃げるのかランサー！」

セイバーは叫ぶが動けない。

「あいにくマスターの指示でな。追ってくるなら、死ぬ覚悟で来い」

ランサーは去って行った。

だがセイバーは油断なく剣を構えた。

もう一人の剣を持った男に。

「どついつ事情かは知りませんが、先ほどの礼は言います。ですが敵であることには変わりません」

不可視の剣を男に向けるセイバー

「ちょっと待ってくれセイバー。月見里は敵じゃないっ!!」

「なっ！ マスター危険です！ 下がってください」

「だから平気だつて！ 月見里一体何なんだこれは!?!」

セイバーを押しつけて出てきた土郎。

「…マス、ター…だと!?!」

セイバーの放った土郎への言葉で月見里航は愕然とした。

「貴様っ！ ハーレムでも作るつもりか!?!?!」

心から叫んだ。

「なんでもっ?！」

衛宮士郎は混乱した。

これは求愛ですか？（前書き）

残念な主人公

これは求愛ですか？

おっと余りに衝撃的な展開に我を忘れてしまった。

衛宮の襟首を掴んでシェイクしまくった。

今は反省している。

本当に反省しているんだ。

だから、

「セイバーと言ったか？ 出会ったばかりの男に いきなり跨るとはなかなか情熱的ではないか、だが、その気持ちは嬉しく思う。君の気持ちに応えよう。だから、まずは私の首元に突きつけているコレを退ける事から始めよう？ そうだな…。子供はフットボールチームが出来る位欲しいから頑張ってくれ（キリッ）」

「　　ツツ！ 黙りなさいっ！」

おれ、可笑しいな。さっきより風切り音が強くなったぞ？

セイバーさんの手が震えてる？ あ、そうか照れてるんだな。

あれれ、首筋から赤い液体が滲んできたよ。

「衛宮君、助けたまえ」

「なんで偉そうなんだよ。でもセイバー頼む。やめてくれ。月見里は、その……変わっているが、…悪い奴…じゃない…」

何故、最後のほう言い淀んでいるのだ。

「お前つ、命の恩人に対してもっと敬う気持ちはないのか！」

「そ、そっか。セイバーありがとな」

俺にじゃなく、セイバーと呼ばれる少女に頭を軽く下げる衛宮。

「マスターを守るのはサーヴァントの役目ですから、気に為さらずに」

ちくしょう！ 衛宮めっ！

俺と青タイツとの戦闘での勇姿見ていなかったなっ！

まあこの際仕方ないと、捨て置こう。

この超展開に付いていけてないのは衛宮だけじゃない。
話を進めよう。

「その先ほどから言っている”マスター”と”サーヴァント”とあと”セイバー”や”ランサー”って言うのも解せん。どついう意味なのだ？ 文字通りご主人様とメイドと言うわけでも無さそうだが、衛宮の家に借金形の形に売られて来た訳ではあるまい？」

そうであったなら衛宮君とちょっと”お話し合い”をしなくてはならないが。

「そうだ、きちんと説明してくれセイバー。それから月見里は不用意な言葉が多すぎるから自重してくれ。」

……………衛宮君が冷たいです。

「この聖杯戦争を戦う為、貴方によって召喚されたサーヴァントです。さつきも言ったはずでしょうマスター」

なんと！？ では俺も召喚して可愛い女の子ゲットだぜ！ って出来るのか！

ぜひ、召喚の仕方を覚えなくちゃ。

「だ、だから！ その聖杯戦争とかサーヴァントとかって言うのは何なんだよ！」

「…そうか、貴方は本当に何も知らないのですね。ならばお答えしましょう」

「聖杯戦争それは」

セイバーの語りだした内容を要約する。

七人の魔術師による殺し合い優勝商品は聖杯で聖杯は何でも叶えてくれる神龍的なもの。

サーヴァントは魔術師の戦い下僕。

……サーヴァントの必要性が分からないんだが。

むっ！？

「セイバー退け」

セイバーも気付いたのか、俺を足蹴にするのを止めた。
相変わらず俺見て警戒はしているが。

「衛宮、新手のようだ」

「新手の気配です。マスター」

「心配するな、衛宮に危害を加えるつもりなどない。もし、そのような素振りがあれば、いつでも俺の命を取るがいい」

「……分かりました、貴殿を信じます。マスター話はあとで」

塀の向こうへ飛び出していくセイバー。

「ちよっ…！ 新手ってまた敵なのか!？」

「衛宮、俺から離れるなよ」

本当は衛宮をここに放置していきたくはなかったが絶対付いてくるだろうし。

俺のそばにいれば逃げる時間くらいは稼いでやれるだろう。

と思い直し、俺達も飛び出して行く。

俺たちが飛び出してセイバーに追いついた時、
セイバーは赤い外套の男を斬り伏せる直前だった。

「やめろセイバー……」

衛宮が叫ぶ。

するとセイバーに光が走り剣筋が止まった。

嘘だろ！？ あんな無理な寸止めできるのか？

なにか魔法的なものが発現されたと考えるべきか？

「とりあえず”彼女”が無事だったということでも良かったとしておう。」

「な……ッ」

セイバーが衛宮に振り向く。

この時、俺はアホ毛もありだなと場違いな事を考えていた。スマン。

「なぜ止めるのですマスター！？ 彼らは敵です！ ここで仕留めておかねば……」

「何を今さら！！」

どちらも正しい。

衛宮はまだ、この聖杯戦争仕組み、概要がきちんと理解できていない。

無論、俺もだが。

急に「勝ち残れば何でも叶えてやるから殺しあえ」っていわれて。

「わかった。僕頑張るよ」とは衛宮の性格じゃ言えないだろ。

逆にセイバーは、

お前の意思なぞ知るか、私は聖杯のために呼ばれた存在なんだ、つべこべ言ってんじゃねーよ。ということになる。

おそらく7人のサーヴァントは龍玉的な役割。

七つそろえて初めて効果を為す。そういう事なのだろう。

では呼ばれたサーヴァントは何のメリットが？

青タイツがゲイボルグって叫んだから、ノリでセタンタ君と言ったが、

叙事詩や神話に出た人物を使い魔になどできるのか？

ゲイ・ボルグ、ケルト神話に出てくる槍だ。

必ず投げた相手の心臓を貫くとされ、神話の半神半人の英雄がもっていたとされる。

まさか本物か？ ありえないだろ。

しかし”因果の逆転”は、因果を捻じ曲げて結果が最優先ということ
そんな魔法聞いたことない。

秘孔を突く前に突いたことにして「お前はすでに死んでいる」って、
なんたるチートぶり。

悪魔召喚や精霊召喚でさえ己が命を代償にするのだ。

そんなチートぶりのサーヴァントを召喚したら、
召喚した直後に命を落として聖杯戦争どころじゃなくなる。
だから到底そんなもの召喚できると思えない。

仮に出来たとしてサーヴァントは何か願いでもあるのか？
じゃなきゃわざわざ龍玉的なものになるとは思えない。

考えても判らない事が多すぎる。

アー、アー、また『前世の常識』で今の事柄を捉えてしまった。
こちらの常識では普通のことなのか？

やはり俺にもきちんとした説明が欲しいところだ。

「お、おまえ！！ 遠坂…！？」

え？ 今さらですか士郎君。

気が付かずに助けたのか、とんだお人よしだ。
俺は俺が助けたい者しか助けない主義なので、
あれが遠坂じゃなかったら助けなかったんじゃないだろうか。
ほんとに衛宮は衛宮であるといえる。

「あのね衛宮君、忠告しておくけど”令呪”は戦いの切り札となる
ものでしょう？ こんなことで使ったらあとで苦労するわよ」

衛宮の手を握りながら遠坂が、また意味深な言葉を紡いだ。

”令呪”ねえ……。直訳すれば命令する呪いって事だろうが。
あんなチート使い魔、素直に命令なんて聞くのか？

「まあそこまでして止めてくれたって訳だし、ここは感謝しとかな
いといけないわね。アーチャーちよつと消えてて」

アイツは恋愛主人公体質に違いない！ だが、やらせはさせんよ。

ハーレムだけは阻止してやる。

遠坂の言葉に赤い外套を着た男が姿を消した。

「え？ 切り札って何のことだ？ …俺、何も使った覚えがないぞ。いやそれよりもお前、本当にマスターって奴なのか？」

「…ちょっとアンタ、…まさか令呪のシステムはおろか、聖杯戦争の事すらろくに知らないってんじゃないでしょうね？」

全く仰る通りなんですが、お前が来なきゃもう少し詳しくセイバ―が、

説明してくれたと思うんだがね。

あと、言葉遣いが乱れてますよ遠坂さん。

「ど素人が」とか「何だってこんなやつが最良のサーヴァントを…」とか溜息つきながらぶつぶつ言い出した。

が、まあ彼女にも何かありそうだと突っ込まないでおこう。

「遠坂、どこへ？」

「中で話しましょう この戦いのあらましを説明してあげるわ。それから、月見里君も、ちょっとお話ししましょう」

それは助かるが、

「あ、気付いてた？」

何でだろう お話し が 違う発音に聞こえたんだが。

トコトコというよりズカズカ衛宮邸に入っただけいられる遠坂さん。

「マスター今のところ彼女に害意はないようです。ここは素直に聞いておくべきでしょう。」

「俺も賛成だ。巻き込まれた身としては判らないことが多い。お前は”マスター”とやらなのだから、俺以上に知識をつけておいて損はないはず」

「ああ。…わかった」

衛宮邸に入る前にセイバーに一言。

「なあセイバー」

「何でしょう?」

「その子供は5人でいいや」

「……………」

無視された。

教会は嫌い（前書き）

主人公、真面目に終わる。

教会は嫌い

衛宮邸の居間のガラスが、見事に砕け散って冬の冷たい風が吹き荒む。

寒くて話し合いどころではないと思ったので、

「sculpture de verre merveilleux」
x .
「」

もう遠坂にバレてもいいかと、魔法を使って窓ガラスを修復した。衛宮と遠坂二人にすごく驚かれた。

ほんと衛宮め俺と青タイツとの戦いをほとんど何も見てなかったんだな。

そんなにセイバーの姿に釘付けか。

「ステンドグラス！？ しかも俺の裸体入り！？」

心とは裏腹に会心の出来映え。

仕事は拘りを持たねばな。

「やめてくれっ！」

「真面目にやれっ！」

二人に怒られた。

ダビデ像張りにかっこ良く作ったのに残念だ。

当社比1.5倍くらいにしてやったのに非常に残念だ。

何がつてナニですが？

再構築しなきゃダメだろうか？ チラッ

「不満な顔するなっ!!!」

衛宮宅の居間で茶を啜りながら説明会突入です。

「おほん、それじゃあいいかしら？　まずは私から。さっきの衛宮君の質問の答えからね。私は聖杯戦争の正式なマスターよ」

正式？　つまり衛宮は不正式、イレギュラーということか？
まあ本人も全くわかってなかったしな。

「そして貴方と同じ魔術師でもある　…衛宮君は知らなかったみたいだけどね」

え、衛宮、魔法師だったのか……。
いや魔術師か？　呼び方が違うとだけ今は解釈しとくか。

しかし、魔力隠蔽もうまくないし、てか、してるつもりだったのか？
一般人と変わらない程度しか感じないんだが…才能あまりないのか…。

それでも、セイバーを召喚したんだから潜在的にはあるのか？
今後に期待つてところなのだろうか。判断に悩むなあ。

「だってお前、学園じゃ誰から見ても優等生で男子にとっちゃアイドルみたいな存在で……」

急に何言ってるの？　それって遠まわしな告白？

「あら、衛宮くんもそういつ風に思ってくれてたわけ？」

「いや、それは」

コイツも初心よのお。なんと分かり易い…。

「魔術師は正体を隠すものだもの。衛宮君も魔術師だって事、隠しているでしょ？」

やはりそうなるのか。こつちの世界では魔法いや魔術か、めんどくせえな魔術でいいや…。は禁忌にあたるのか。

「えっ、知ってたのか？」

「なにセマスターっていうのは魔術師にしかねないものよ。まあ、それでも衛宮君の場合は何かの事故だったんだらうけど。まさか貴方がマスターだなんてこつちも驚きだわ」

なんで、俺を見る？

「で、今度は貴方のことおしえてくれるかしら？ 月見里君」

「ああ、俺の事は追々でいいだろ。ちょっと二人だけで話したいこともある。それより令呪だとかサーヴァントが何か、セイバーとかランサーとかの説明を先にしてくれないか？」

「そ、じゃああとで詳しく話して頂戴。じゃあ令呪についてだけど…」

ちよつと笑顔が怖いんですが……。

令呪

それは聖杯戦争のマスターに与えられる。

令呪持ち〃聖杯戦争に参加しているマスターといえる。

衛宮の手の甲にあるあの刺青みたいな奴か。

サーヴァントに対して3回限りの絶対命令を下せる。

遠坂にセイバーが斬りかかった時に発生したアレか。

……なるほどなるほど。

これがあるからチートなサーヴァントを縛っておけると。

「令呪の事は把握した。衛宮も大丈夫か？」

「ああ、問題ない」

「じゃあ、サーヴァントとセイバーとかランサーというのは？」

「過去の英雄達の魂よ、セイバーやライダーは割り当てられたクラス」

「英雄ってアレか、昔話に出てくる……」

「そう神話や伝説…数えればキリがないわね。生前の偉業により英雄と認められた者は死後、『英雄の座』に迎えられる」

過去の英雄といったが、確かに叙事詩、伝承、物語なにかしら文献残ってるとしても

実在していた確証は無い。だがそこは問題ではないらしい。

どれだけ知名度があるか、崇められてる対象かということらしい。

頭痛くなってきた。

たとえば、漫画の主人公がずっと語り継がれ神聖視されれば、英雄の座に迎えられると言うことか？

「オツス！ オラ 空、オメエかあオラを召喚したんわあ」

思わず米神を押さえた俺は悪くない。

「ただでさえ、英霊の召喚なんて」

聖杯はそれらに7つのクラスに当てはめることで召喚を可能にした。
セイバー 剣使い
ランサー 槍使い
アーチャー 弓使い
ライダー 騎乗兵
アサシン 暗殺者
キャスター 魔法使い
バーサーカー 狂戦士
サイヤ 野菜人

別に全員が剣使いでもいい気がするが……。

アレかジャンケンの要素を取り入れたみたいな感じか。

全員が”グー”ばかりじゃ決着つかないから”チョキ”と”パー”も使おうぜ。

って事か。

だあーもうそれで納得しとこ。

あと真名隠すためっていう理由も一応あると。

空がカカ ットってことだな、いや違うか。

真名がばれると弱点もわかってしまうから。

そして聖杯が呼んだクラスの英雄を各マスターが召喚と。ランダムっぽい言い方してたが、何か裏がありそうだな。

で、そいつ等使って戦って勝ち残ったら聖杯あげると。

ほかにも色々あったが胡散臭すぎる。

「前回の聖杯戦争」とか「聖杯は御三家が」とか

「聖杯は便宜上そう呼んでるだけ」とか、もう面倒だから聞き流そう。

大体、俺マスターじゃないしな。

「これが聖杯戦争のあらましよ」

「遠坂、一つだけ質問がある」

もう空腹だが、おなか一杯。でも一つだけ聴きたいことがある。

「なにかしら？」

「宝具つてのはサーヴァントが持つ武器と解釈していいの？」

セイバーやランサーがお互いに向かって言ってたヤツだ。

「ええ、大体あってるわ。付け加えるなら武装であり、象徴であり、奥の手。英雄とは宝具とセットでこそ英雄なの。だからそれには凄い力が秘められてる」

なるほど。セタンタにゲイ・ボルグ。

「ジミヘンのギター然り、呂布の方天画戟然り、スークの無限バシダナ然りということか」

サーヴァント、チートすぎだろ。

でもランサーがゲイ・ボルグ使ったから正体がわかったってことになる。

デメリットもあるということか？

「お前の例え、統一性が無いな……」

余計なお世話です。

「悪い、もう一つ質問だ。宝具使うときは詠唱のようなものは絶対いるのか？」

「ええ、宝具の真名が開放されて宝具の力が最大限発揮できるわ。だから、ここぞという時に使うことが常識ね」

宝具の名前が判れば持ち主の名前も判ると。

必殺技は必殺ゆえに必殺技か……。

防がれると手痛いカウンターが待っている。

いやしかし、弱点がばれた所で弱点なりうるのか？

有名どころでいけばオーデイン、彼の弱点といえば自分自身の武器である

グングニールもしくは最後食い殺されたフェンリルということになる。

……どうやって用意するの？

「わかった、さんきゅ」

あえて簡単そうなルールに見えて実は色々な縛りと制約があり、考えると複雑。

何かを隠すため表向き、そうなってるように見せて、

裏があるとは思わせようにはしていないか？

……もう、なんだ疲れた。

「とにかく衛宮君はその聖杯戦争に巻き込まれたわけよ。さあこれから行く所があるからついてきて」

「俺はまだ納得してない！」

衛宮が遠坂に突っかかっているが、

「俺腹減ったんだけど、飯が出ないなら帰っていいか？」

部外者とは言わないがマスターじゃないし。後はお二人、いや三人でやっとなんか。

「その前に月見里」

「なんだ衛宮？」

「ランサーに襲われたとき、どうしてうちにいたんだ？」

「おまつ、それ言っちゃおう！？ ご飯貰いに着たらお前が窓から飛び出して来るし、変な奴に追われてるし、俺だって訳わからなかったのにお前が危ないと思って助けに入って、槍で突かれ捲るし、そしたらいきなり現れたセイバーに後ろから吹っ飛ばされるし、拳銃の果てにセイバーのピンチに、吹っ飛ばされたにも拘らず、助けに入った俺にそれ言っちゃおう！？」

「ああ、うん。なんかスマン」

「ちょっと待ちなさい！ アンタ、サーヴァントとやりあったの！？」

「ちょっとだけな。ランサーって奴も油断してたし、すぐセイバーが出てきたし、俺もそんなヤバイ相手だとは知らなかったんだ。いやはや無知とは時として恐ろしいな」

あんな宝具使われてたら今頃あの世だ、それともまた別の世界に転生か？

もし、今後戦うことがあるならその辺、頭入れとかないとな。あと俺の説明もそのうちしなきゃならん。どこまで話すかだな。

「…呆れた。でも、月見里君が衛宮君の家に居た訳はわかったわ。そういうことなら貴方も着いて来なさい」

「なんで？」

「今から行くところは聖杯戦争を監督している奴のところ。そこではサーヴァントを無くしたマスターの保護なんかもしているわ。貴方はマスターじゃないけど保護してもらいなさい」

そういうことか。

俺も、どのマスターか知らないが、狙われる可能性もあるというところか。

「だが、断る！」

べ、別に、これが言いたかったからじゃないんだからね！

「貴方、死にたいの!？」

「…下天のうちをくらぶれば、夢幻の如くなり。一度生を享け滅せぬもののあるべきか。俺は俺自身で道を決める。だから断る」

これが俺の座右の銘だ。

人は何時しか死ぬ、それが早いか、遅いかの違いだけ。

別に死に急ぐ訳ではないが、保護してもらってまで生きたいと思わん。

なら、俺は俺のやりたいように生きて死ぬだけ。

その過程で死ぬことがあってもそれが俺の人生だったということだ。

「……………」

「……………」

「……………」

え、なんで皆そんな顔で俺見てるの？

そんなに変な事いつたか？

あつ真顔でそんな恥ずかしいこと口にすんなと？ 厨二、乙って事？

…………… 恥ずかしいんですが。

「まあ、しかし監督役の顔を見ておくのも悪くないだろうから付いて行く」

話題を転換して。この白けた空気を払拭しよう。

「そ、そう。じゃあ行きましよう」

真冬の夜の静寂は心安らぐ、夜空に広がる星がとても綺麗だと思わないか？

その静寂を切り裂くように救急車のサイレンが過ぎ去っていったが、ここ最近サイレン音を頻繁に聞く。テレビじゃ新都のほうで欠陥建築のせいでガス漏れが相次いでるとか。

こりゃあ、今回の件と関係ありそうだな。

俺たちは監督役のいるところへ向かっているわけだが。

「借りをつくったままじゃ嫌、勘違いしないでよね」とツンデレってたり

「戦う戦わないは貴方の自由だけど次ぎ会ったら敵よ」とかヤンデレったり

ヤンデレは違うか、

それでも面倒見てるんだからコイツもお人好しだな。

兎も角、

空気が悪くなったので和ませてたろう。

「おい、ポンコツ。ひとつ貸しだからな。礼は令呪でセイバーをおれの嫁にするか、帰ったら飯食わせるかにしろ」

「ポンコツって言うな！俺だって頑張ってるんだ！あとドサクサに紛れて何言ってるんだお前！」

監督役のところへ行く時、問題が起きた。
通常サーヴァントは霊体化できるらしいのだが、
衛宮とセイバーは”パス”という繋がりがうまくいってないそうだ。
遠坂の赤いあの男も霊体化していて今もその辺漂っているのだとか。
まあそんなわけで、セイバーさんは霊体化できないので、
鎧着たまま連れ出すことになったのだが、目立つからといって
何を考えてんだか黄色い雨合羽着せやがった。
そのセンスに脱帽だ。余計目立つわ！

あまりに不憫なその姿を見て、衛宮にもう着ない服を何着か出させて
錬金魔法でコートを作ってあげたわけだ。

「令呪の一つや二つでちいせえ事言つなよ。減るもんじゃねえだろ
?。」

「減るし！ 小さいことじゃないっ!。」

錬金あんまり得意じゃないんだが遠坂の着ている赤いコートを
参考にしたからそこまで変じゃないハズ。ちなみに色は藍色。

「セイバーも雨合羽着せるマスターよりいいだろう？ いつでも俺
の胸へ飛び込んで来い」

「なっ?! 貴方は私を馬鹿にしているのですか！ 私は騎士です
！ マスターの剣と盾になる身。主を違えることはありません!。」

「主じゃなくて伴侶な？ あ、俺のことは航と呼んでくれていいぞ」

「そ、そういう問題ではありません!。」

「やめろよ、月見里。セイバーが嫌がってるだろ」

「はあく。貴方達ほんとに自分の置かれてる立場わかってるの？ さあ着いたわよ。ここが監督役の神父がいる言峰教会」

遠坂が呆れながら指差す先には確かに教会があつた。
うわっ、ダメだここ気色悪いわ。

「マスター、私はここで外敵に備えます。 良くない空気です。 貴方も決して油断しないように」

「俺もここで待ってるわ」

俺もセイバーに便乗しよう。
今すぐにでもこの教会を跡形もなく消し飛ばしたい衝動に駆られるのだ。

監督役のその神父をみたら、如何にかなりそうだ。

「はあく。わかったわよ。行きましよう衛宮君」

どうやら俺の「行きたくない」という頑なな意思を感じ取ってくれたらしい。

衛宮と遠坂が教会へ消えていった。

「気持ち悪いところだな？ ラスポスとか出てきそうだ」

死臭が漂ってくるぜ。

教会の近くに墓があるんだから間違っではないんだが、

もつと生々しいというか、神の家なんて馬鹿馬鹿しい感覚。

「…貴方は前回の聖杯戦争のことを何か…知っているのですか？
それよりサーヴァントと渡り合えると言うのも気になりますか…」

「航だ。ワ・タル。その堅苦しい喋り方如何にかならないのか？」

「喋り方はどうにもなりません…ワタル」

お、一步前進か。

「ああ、そう。まあいいけど。…前回の戦争のことは衛宮の家で聞いたことしか知らない。まあ新都の方にあるだっ広い公園の訳は理解できたし、おそらく前回もこの教会が何か絡んでたろうくらいは推測できるがな」

俺はこの街にやってきたのは7年前だからな。父上が家建てるために引っ越してきたのだ。

「見た目によらず、なかなかの洞察力なのですね」

ソレ褒めてるのか。だが君、前回も聖杯戦争に参加してたのか？
まあ俺にはどうでもいいことか。

「お褒めに預かり光栄だ。サーヴァントのほうは何でだろうな？
よく分らないけど…。最近、超絶に力が上がったって感じた。俺も何らかの理由で聖杯の恩恵？ 預かったのかもな。そう考えるしかないな」

まあ他にも色々あるけど嘘は言っていないし、こんなもんでいいだろ。

「……そうですね」

「ああ。…それよりだ。衛宮のこと宜しく頼むな。アイツは納得できないだとか、なんだかんだ言ってたが、きつとこの戦争に参加する」

他の悪意をもつマスターやサーヴァントを見過ごせないとか言っ
てさ。

「お前のマスターは甘ったれの半人前だが、真っ直ぐな奴なんだ。だから頼むな？」

「当然です。…ですが、ワタルのことを誤解していました。…マスターは良い友をお持ちのようです」

こんな表情も出来るんだと、その柔らかな微笑に目を奪われた。

アレは化け物です(前書き)

視点変更多し

主人公頑張る

アレは化け物です

何がいけなかったのかは分ってる。

「俺、この戦いが終わったらあの子にプロポーズするんだ」

不用意の一言が招いたといえ、あんまりじゃないか。

きつとこの世界の神は俺が嫌いなんだ。

俺もアンタが嫌いだ。

だから、これが終わったら天に向けて中指突き立ててやる。

教会から出てきた衛宮と遠坂。

士郎に駆け寄るセイバー。少し顔色がよろしくないが、中で何かあったのだろうか？

「大丈夫だ」

何かあったな。しかし何か決意も固めてきたみたいだ。

「セイバー」

「はい」

「俺はこの戦いを見過ごせない。だからマスターになる」

「はい」

「ちょっと頼りないマスターかもしれないけど、これからよろしく頼む」

「はい。シロウ」

握手を交わすセイバーと衛宮。

おおおう。俺があげた好感度が一瞬で飛んだ……。

恐るべし！ 恋愛主人公体質！

「それじゃあ帰りましょう」

遠坂の声で町まで戻るため歩き始める。

ようやく長い一日が終わる。

今日は色々あったな。柳洞寺の俵にかかった暗示的なもの上書きし

たり、
学校に仕掛けられてた結界に嫌がらせして、家帰って使い魔召喚したら、

愛剣がててきたり、青タイツに槍で突きまくられたり

「せめて自陣に戻るまでは気を抜いてはいけません」

「そうか、わかった。セイバーがしっかりしてくれて助かる。

俺は魔術師として半人前だし聖杯戦争の事も分らないことばかりだ」

セイバーに吹っ飛ばされたり、

「お前が味方で良かった。……頼りにしてるよセイバー」

「はいっ」

ああ、夜空が浮かぶ月が綺麗だなあ。

「俺、この戦いが終わったらあの子にプロポーズするんだ」

……相手いないけどな。 なんかこう主人と従者のいい雰囲気見ると……ね？

ああほんと夜空が綺麗だ。

「そう。好きにしなさい」

遠坂の突っ込み。

「くら、心の声にツッコミいれるな」

「貴方、口に出していたわよ」

「そうか…。聞かなかったことにしてくれ。後、俺について色々聞きたいことあるだろうが明日でいいか？ 今日のもう疲れた」

「ええ、そうね。それでいいわ。じゃあここで別れましょう」

「だな、腹減った」

「衛宮君わかってると思うけど、これで貸し借りなし。次ぎ会うときは敵同士よ」

「無論です。こちらも手加減しません」

士郎に代わって答えるセイバー。

…遠坂。

敵だ敵だと何度か衛宮に言ってるけど自分に言い聞かせてるんだろ
うな。

非情になれるなら最初から助けなきゃいいのだ。

優しいんだな。

「ちょっと何ニヤニヤしてるのよ！ 月見里君」

「いや、なんでもないよ」

頬の筋肉が緩んでいたらしい。

「なによ、衛宮君まで？」

「ああ、お前のおかげで助かったよ。ありがとう。遠坂はいいヤツだな。俺お前みたいなヤツ好きだ」

ああ、衛宮に殺意が沸いてくるぜ……。

一級フラグ建築士郎の名をお前に送ろう。

「…なっ！？ ちょっとわかったのアンタ！？ 私たちは敵同士で

…」

「？ わかってるさ、だけど世話になっただんだ礼を言うのは当然だろ」

衛宮らしい答えだけどさ、まさに天然ジゴロ。

「…もういいわ。せめて早死にしないように気をつけるのね」

「ねえ、お話は終わり？」

冬空に響くその透き通った声は美しく幼い。

声を追って視線を向ければ、坂の上。

色で表すなら白。淡く儂いその少女。

そしてその存在と似つかわしくない化け物。

何がいけなかったのかは分ってる。

俺、この戦いが終わったらあの子にプロポーズするんだ

だって死亡フラグだもの。 わたる

「バーサーカー」

あんな化け物が近付くまで気付けないとは……。
アレもサーヴァントか、霊体化してやがったな。

目測 身長2m半、体重300Kg超 の上半身裸の大男
ありゃ、ヤバイ。青タイツ以上にヤバイ。その存在に理性などなく
狂気に満ちている。

あいつのクラスなら一般人でもわかる。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

無邪気に微笑む少女。

衛宮お前ってヤツは…あんな少女にまで…。

「知り合いか衛宮？」

出来れば友好的な知り合いだと信じたい。

「いや、こないだ道ですれ違った程度？」

「おまつ、どんなフラグたてやがった！」

こんな事言ってるけど余裕ありませんから！

「驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

鉛色の巨躯、理性の宿らない紅い瞳。

見てるだけで圧倒される。

「アーチャー、アレは力押しでなんとかなる相手じゃない。ここは貴方本来の戦い方に徹するべきよ」

呟く声。それに、姿のない何かが応答する。

ああ赤い外套の男か。

「君がそう言うなら了解するが……凜ではアレの突進は防げまい」

「それでもやらなきゃならないのよ」

全く、コイツもほんとお人好しだ。衛宮と変わらないんじゃないか。

「衛宮くん、月見里君。逃げるか戦うかは貴方たちの自由よ。

……けど、出来るならなんとか逃げなさい」

俺たちを逃がそうってんだから。

「相談は済んだ？　なら、始めちゃっていい？」

なんでもない世間話をするような少女の声。

少女は行儀良くスカート裾を持ち上げて、お辞儀をする。
なんと場違いか。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フオン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン」

面識はなくとも知り合いのようだ。

ちよいと震えてるじゃないか。対して少女はその態度に満足そうに
笑い

「　じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

バーサーカーと呼ばれたモノが、坂の上からここまで、何十メートルという距離を一息で落下してくる　！

「　シロウ、下がって……！」

月の下。

流星じみた何条もの“弾丸”が、落下してくる鉛色の巨軀をつるべ打ちにする……！

その一撃一撃は右盤すら容易く穿ち貫くだろう矢。

その光景をサーヴァントって馬鹿げてるなあと眺めてた。

「うそ、効いていない　　!？」

遠坂の驚愕。

鉛色の巨人には、何の効果も得ることはなかったらしい。

「…Ouvrez」

落下地点まで走り寄ったセイバーがバーサーカーの大剣に剣をぶつける。

さて、出遅れたが、やる事は決まった。

セイバーが凌いでいるうちにマスターを倒してしまおう。

「おい衛宮！　間違ってもセイバーを助けようなどと思つな」

「え、あ、おい！　お前こそ何処行くんだ!？」

衛宮の声を無視して愛剣と共に走り出した。

これは何の冗談だろう？

サーヴァント同士の戦い。

初めて見た時、私はただ立ち尽くすのみだった。

今、目の前のそれも人智をはるかに超えている英雄達の戦い。

気を抜けば魅入ってしまいそう。

理性をカットして戦闘に特化したバーサーカー。

本来、バーサーカーは能力的に劣るものなるもの。

あれは元より”下地”が別格。

対するセイバーもその猛攻を捌いている。

タイミング、スピード少しでも間違えれば即、死に至る攻撃を。

白兵戦最強といわれるサーヴァントだけある。

そんな中に異物が飛び込んでいるのだ。

はつきり言っただけの正気を疑う。

「チツ、やっぱり抜けねえ」

おそらく最初に狙ったのはバーサーカーのマスター。

人間には遠く及ばない存在のサーヴァント。

勝てないなら、同じ人間のマスターを倒す。

聖杯戦争では基本といえる。正しくそれは正しい。

だけど、バーサーカーがマスターの危機を感じ取ったのか、
相手取っていたセイバーを強引に振り切り、
マスターへ向かう敵を排除しようと巨大な岩の剣を振り下ろす。

…普通の人間ではここで終わっている。

それを避けたのだ。

そればかりかお返しとばかりに、強烈な魔力を孕んだ攻撃を三度加えて見せた。

さすがにこの攻撃にバーサーカーも仰け反り、そこにセイバーがさ

らに一撃。

どれもバーサーカーに大したダメージを与えていないが、

それでも渡り合っているのだ。

ただのクラスメイトが、ましてやマスターでも魔術師だとも思っていないかった奴が。

月見里 航

クラスメイトであり、おなじクラスになって間もない頃、突然告白して抱きしめてきた変人。
返事を聞く前に抱きしめるって何考えてんだか。
思わず叩きのめした私は悪くない。

ただ、これまで完璧を通してきた学園生活の事を考えたら溜息つきたくなった。

だけどその後、本当に何も無かったかのように振る舞い。普通に挨拶も交わすし、日常的な会話もする。
意外といいヤツなんだ。

とか思っただけど、やっぱり色々変な奴だった。

男子達を言葉巧みに操り、煽り立て暴走させる。

その数や両手で数え切れない。

女子は女子で恋愛相談をしている。
相談する相手間違ってると思うけど。
曰く、「彼の占いはけっこう当たる」だそうだ。

彼が悪の組織の黒幕や新興宗教の教祖とかやったらと思うとゾッと
する。

一度、何でわざわざ、そんな馬鹿な事ばかりするのか聞いてみたこ
とがある。

「自分が楽しい人生じゃなきゃ生きてても、つまらないだろ？ な
ら 自分の楽しい を皆に押し付ける、そこに他人の意見や意思な
んか関係ないと思うんだ。うん」

夕暮れの教室で満面の笑顔を浮かべたソイツ。

なんて自分勝手なと思う反面、
私とは対極の位置にいて少しだけ羨ましいと思った男子。
そうただ、ちょっと変わってて眩しいと思った奴が

「遠坂っ！ アーチャーに援護させる！ こっちは勝手に避ける！」

「わかったわ！ アーチャー！」

「承知した」

視認できるほどの強大な魔力、その魔力の奔流を身に纏って。
それはまるで神話から出てきた英雄そのもの。

「セイバーよ、無理を承知でアレをしばし足止めできぬか？」

アレはいつか狩った竜より性質が悪い。

「貴方は？」

さすが剣使いセイバーと言われるだけあって、超一流の剣士。

即席とは思えない連携。

長年の戦友に背中預けているような安心感。

だが、いかんせんお互いの事を知らなすぎる。

コレ相手に長くは続けられないだろう。

「今一度、アレのマスターを狙う」

こんな馬鹿げた存在いつまでも相手にしてられない。
狙うは大将首。

それに遠坂や衛宮もいる。守るには、

「攻撃は最大の防御也、よ」

「わかりました。引き付けます」

再び、バーサーカーへと駆ける。

ああ、懐かしき戦いの日々よ。

俺は今度も生き抜いて見せよう。

「はやくそんな奴ら倒しちやえバーサーカー！」

少女は最早、余裕がなかった。

自身の最強のバーサーカーが攻めあぐねているのだ。

セイバー、アーチャー、そして謎の男。

セイバー以上の魔力放出を持って戦うその姿。

バーサーカーと斬り渡るたびに紫電が走っているデタラメだ。

そして何より最初に向けられたあの殺気。

少女がここに来る以前、冬の森で向けられた獣とは違う。

明確に、ただ殺す、と。

そして今もまだ、バーサーカーを掻い潜り自分を殺そうとやってくる。

バーサーカーも、さすがにバーサーカーが強いとは言え、サーヴァントを同時に3体相手取るのは容易な事ではなかった（一人は人間だが）。

隙あらば己がマスターを殺しに行こうという奴がいるのだ早々、マスターとの距離をおく訳にもいかないと。

本能で理解した。

そしてこの目の前の敵を沈黙させるには己が命を差し出さねばならないとも。

セイバーも頑張って引き付けてくれたが、やはりダメだった。

見捨てれば或いは……。

ただそれが出来なかったのだ。

自分もまだまだ甘いと痛感。

いやこの世界に生まれて来て変わったと言っべきか。

それでもチャンスがやってきた。

バーサーカーが放った横殴りの攻撃をセイバーが下、俺が上に回避し、

セイバーはバーサーカーの足を切り裂いた。

体制が崩れる鉛色の巨体。

そこに 好機!!

獲った!!

バーサーカーの首が舞う。

「ワタル！ 後ろです！」

が、セイバーの声で後ろを振り返れば、

「こやつ不死身か！？ がはっ！」

首のない状態で振るわれた一撃を喰らい、幾度もアスファルトに叩きつけられる。

漸く止まったか…。

霞む視界。

内臓が捏ね繰り回されたような嘔吐感。

口の中が切れたか、鉄の味が広がる。

ブースト全開でかけてるのに、この威力。

「ちょ、ちよつとしかっりして！ 大丈夫っ！ 月見里君！」

随分と遠くまで転がってきたようだ。外人墓地か。

目の前には美少女が心配そうに俺を見つめている。

遠坂が心配しているのだ。

：美少女に心配されるたあ嬉しいねえ。だが、余韻に浸ってる暇はない

頭を軽く振り上半身を起こす。

「なっ!?!」

バーサーカーの首が戻ってる!

「確かに獲った筈…」

「ええ、再生したわ」

そんなヤツにどうやって勝てと?
いや待て、奴はセイバーにかかりきり、
なら今が好機、マスターを倒す!

「じゃ、一寸行ってくる。…ってあら?」

足に力が入らず、と尻餅ついてしまった。

体に力がいらないねえ! 魔力もけっこう使ったな。

あの一撃耐えるためにブーストかなり強化してみたんだ。

アスファルトが所々、抉れているな。

道路作った人ごめんなさい。

「そうなって当然よ、それでもその程度ですんで良かった方よ。と

「いつよりあそこまで、やれてた事自体馬鹿げてるの！」

「そうですか、でも、そうするとセイバーは？」

「……押されている。」

「そうよ。バーサーカーには勝てっこない。アイツは古代ギリシヤ最大の英雄ヘラクレスなんだから」

「白い少女がテンパってか余裕を取り戻してかしらないが、自分のサーヴァントの正体バラした。」

「それがわかった所で何ともならないが。」

「助けねば、セイバーは倒れるか……」

「今も押し込まれてアスファルトをこっちに向かって滑ってきた。」

「何馬鹿なこと言ってるのよ！ 今度こそ死ぬわよアンタ」

「俺を常識で括ってくれるな。」

「エネルギーゲージは通常の三倍あるのだ。」

「嘘だけ。」

「遠坂よ、衛宮を殴っても押し留めておけ」

「今にも飛び出していきそつだ。」

「アンタ死ぬ気！」

「心配せずとも死ぬ気などないわ。なに、飛び道具を一つくれてやるうと思っただけよ」

遠方射撃しているアーチャーもなんか企んでそんな雰囲気あるしな。魔力を全身に巡らせる。もうちょっとだけ頑張ってくれ俺の体。

「さあ、第二戦と参ろうか」

ダメだ

遠坂達の攻撃は弾かれてる。

セイバーの攻撃も効かない。

一度、倒したのに

月見里はもう戦えない。

アイツにはもう何やっても効きやしない。

「がっ…はッ」

「セイバーッ!!」

もうやめろ、お前このままじゃ本当に死んじゃう!!

俺には何もできないのか!

剣を地面に突きたて膝を付くセイバー。

その姿を目にした時、俺の理性は木っ端微塵に砕け散った。

「セイバーっ! 衛宮を抱えて後ろに飛べッ!!」

アホ衛宮! やっぱり飛び出してきやがった。

空気を切り裂く轟っという音と共にアーチャーから放たれたナニカ。

それに合わせて残りの魔力を全部込めた俺の最大の一撃。

名をつけるなら『超音速衝撃波』とでも付けようか。

先に謝っとく。かなり吹っ飛ばされると思うからスマン。

衛宮セイバーが退き、囃らずとも十字砲火の用を成し、次の瞬間

閃光

爆発

真白

無音

そして熱風

体力も魔力もほとんどスカラカンの俺は為す巢でなく吹き飛ばされた。

どうだ？ これで？

爆心地染みたそこに、それでもソレは立っていた。

いや、上半身は吹き飛ばした。

だが地面に生えた下半身から再生しているのだ。

モウ、オワタ としか言いようがない。

「見直したわりん。やるじゃない、アナタのアーチャー。フッフ、

今日はこれで終わりにしてあげる」

何処からか少女の声が聞こえる。

なんと?! そういうことなら早々にお引取り願いたい!

「そう、どういつわけかしら?」

別に理由なんてどうでもいいと思う。いま彼女の機嫌を損ねてはいけない。

空気呼んで遠坂さん。

「貴方達に敬意を表したの。わたしのヘラクレスを3回も殺したんだもの」

じゃあ早く帰ってください。

「それじゃあまたねお兄ちゃん。それからそっちのお兄ちゃんも」

はいさようなら。

どこにいるか知らないが手を振るシッシッあっちいけと。

そしてバーサーカーの気配が消えた。

「シロウ! しっかり」

「衛宮君、今抜くわ」

「おお! 痛い! もっとそっと抜いてくれよ」

衛宮君の背中に石の破片が突き刺さってる痛そうだね。

アレ俺かアーチャーの一撃で吹っ飛んだ破片だろうなあ。

でもアレだけ喋れてるなら大丈夫だな。

…さて、俺を心配して誰か来てくれるだろうか。

「大丈夫か？ 少年」

お前かよ！

とりあえず、夜空に向けて中指を立て意識を手放した。

アレは化け物です(後書き)

戦闘描写は難しい

ワタル、ステータス（前書き）

のぞく危険 厨二成分過多

ワタル、ステータス

月見里航（ヤ・マナシワ・タル 伊 1789）1877
嘘）

クラス：ジョーカー（適当）

真名：月見里航（ヤ・マナシワ・タル 伊 1789）

1877 嘘）

性別：男性 身長・体重：178？ 69？

属性：混沌・善

特技：破壊すべき深刻な有様
シリアスフレイカー

能力値

筋力 B 魔力 A

耐久 C 幸運 C+

俊敏 B 宝具 B

聖杯戦争により何故か各ステータス、1ランクアップ中。

また、転生者のためスキル（真）は全て（偽）に生まれ持った才能になった。

クラススキル

対魔力：C

第二節以下の魔術は無効化する。大魔術や儀式呪法などを防ぐことはできない。

聖杯戦争前はDであったが何故か戦争開始時ランクアップしている。

単独行動：A+

マスター不在でも行動できる能力。

転生し受肉しており、凜の魔術師の眼を持ってしても“人間”と断じられた。

当たり前だ。

保有スキル

不退転

何事にも屈しない強い信念。

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉、魔眼などの能力低下

“重圧”によるものを軽減する能力。

行動不能にならないだけであって勇猛のような無効化はできない。

心眼（偽）：B

直感・第六感による危険回避。

転生者のためスキル（真）は全て（偽）に生まれ持った才能になった。

真眼（偽）：A

魔力を発するもの、痕跡などを感じ取る力。

要は人間魔力針。本人曰く俺って超敏感体質なのさ。

魔術：B

オーソドックスな魔術を行使可能。

占星術や付加魔術などが得意なようです。

魔力放出：A

身体や武器に魔力を纏わせて強化して戦う技能。
本人曰くブースト魔法。

カリスマ：C

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、小国の王としてはCランクで十分と言える。

よくクラスメイトを煽って暴走させている。

宝具

『銘も無き王の剣』
パデナンス・イピロイ

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：1〜2 最大捕捉：1人

飾り気の無い両手剣。但し両手剣の中では小振りな方。片手でも使用可。

精霊に貰ったとか、岩に突き刺さっていたとか、天から降りてきたなどの逸話はない。

只の両手剣である。この世界だとクレイモアと呼ばれる種類。

ただし、持ち主が生涯において色々この剣で斬った事で竜殺しなどの能力も持つ。

『前世の世界』で叙事詩や物語として継承され宝具として昇華した。

解説

こことは違う、何処か別の世界に生まれた英雄。

平民から小国の王に成り上がり、その波瀾万丈な生涯を閉じた。

彼の死後も偉業を称えた、叙事詩や御伽話が語り継がれているらしい。

どういふわけか転生し、現在に至る。

聖杯から能力アップの恩恵を受けているようだが、
サーヴァントととして登録されてはいない。

決闘？いえ喧嘩です（前書き）

アーチャー　ちよい壊れ

士郎、起きない

ワタル　やらかす

決闘？いえ喧嘩です

朝、起きると知らない天井だった。

「…………生きてて良かった」

この純和風テイストの部屋、間違っても遠坂の家じゃないだろう。ということは衛宮邸だな。

体ダルツ……。魔力が全然回復してないな。

昨日アレだけ酷使したんだコレくらいで済んで良かったと考えるべきか。

今生で間違いなく一番使った。

重い体を引き摺りながら、居間を目指す。

しかし何だ、あいかわらず馬鹿広いなあこの日本家屋は、うちの父上が見たら発狂しそうだ。

「誰も、居なス」

当たり前か、まだ早朝に加え昨日アレだけの事があったんだ。

さて昨日の昼からるくに何も食べてない、

衛宮には悪いが勝手に何か食わせてもらおう。

まあ俺も一応一人暮らしだし、家事も一通りできる。

衛宮さんの家の台所を漁る。

冷蔵庫には、なんだよ昨日の残りとかないのか？

しかし整理されてるなあ。まあそれでもすぐ食えるものはない。

ご飯はちよつと残ってる。

卵があつた。

後、醤油。

もう、わかるよな？

自分で作らないのかつて？ 作りませんよ面倒なもの。

「いただきます」

勝手知つたる他人家の勝手 読み人知らず わたる

くだらない事を考えながら卵かけご飯を胃に収めていく。

「足りない」

仕方ないコンビニで何か買つて来るか。

え？ 作りませんよ。面倒なもの。

それじゃあ、お財布もつて（なぜか居間のテーブルに放置）

おおおう財布がポロポロだ。

というかコレ俺の服じゃないな、まあいいや出かけよ。

誰が着替えさせたとか考えたら負け。

衛宮さん家の玄関開けたら視線を感じる。
それもけっこう鋭い。

「このプレシヤー、…アーチャーか!？」

「ほう、気付いたか少年」

いつの間にか赤い外套着た褐色白銀頭の男が立っていた。

「早いなアーチャー。早朝ランニングでもしてきたか？」

「……君は少々、思考が他人とはズレているといわれぬか？」

腕組んで溜息ついているんだがコイツ。

朝からコンビニ前のヤンキーの如くめんち切ってくる奴に言われたくないが。

「まあよく言われるが。で、何か用か？」

「なに、こんな早く家から出て行くこうというのだ、声ぐらいかけておこつかと思つたのさ」

「一寸、コンビニまで朝飯をな。戻ってくるさ。それよりお前さん、一晩中見張りでもしてたのか？ 人使い、いやサーヴァント使い荒い、マスターもつと大変だな」

「どこかのマスターとは違い、魔力供給さえされていればサーヴァントは疲れる事はない。造作もない事だ」

随分、棘のある言い方だな。

「そんでもた、ご苦労さん。まあ衛宮はボンコツだが俺の友だ。あまり苛めんなよ?」

昨日のバーサーカーと戦った時、最後の一撃、セイバーや衛宮も居たがお構いなしだったしな。まあ、よきせぬ共闘になったって事だろうけど。俺の第六感がそれだけじゃないよーと告げている。

「…わからんな。サーヴァントとも遣り合える程の力量と冷徹に下せる判断力、私を知るに最高峰の魔術師だと思うのだが、何故君ほどの男がアレの肩を持つ?」

再び腕を組み片目でこちらを向くアーチャー。

画になりますね、イケメン滅びる。
逆になんでそんなに衛宮に嫌悪感を持っているの君は?

「なんだ、もつと俺の根本的なことを聞いてくると思ったけど、大した質問じゃないな。真っ直ぐで我武者羅な若者は応援したいという老婆心とでも言おうか。そもそも友とは理屈や打算で計れぬないものだと思うな」

なんかサーヴァントと対峙してる時ってだんだん口調と思考が前世に近くなってくるのだが、
コイツ相手だと何かちよつと違う。

「君の正体はそのうちに私のマスターに話してくれるのだろうか?」
なら、今は私の個人的な疑問を優先したまでだ」

「左様ですか、で、他には趣味やスリーサイズなどを聞きたいと。お前は男もいける口か？ 残念だが俺は女の子が好きだ。だから君の好意は受け取れません」

長々とアーチャーと話しててもしょうがない。とつとつコンビニへ行く。

「馬鹿か貴様は！」

「ハイハイ。振られて暴言吐くなんて最低ですね。それじゃ」

「貴様など野垂れ死んでしまえ」

アーチャーの罵倒を背に受け一路コンビニへ向かう。

コンビニの前で大量のヤンキーに絡まれて絶望した。

「ゼエ、ハア……」

まったく、疲れた。

アレは間違いなくアーチャーの呪い。

こんな朝早くになんで狙ったようにヤンキーがコンビニに居るのだ。

しかも大量に。

”お話し合い”の末、少しばかり朝餉のグレードが上がったが。

無論、ブーストは使えないし、腕力にまかせて”お話し合い”してもスプラッターな惨劇になる。もう力の加減が難しいたらありゃしない。

おかげで服がズタボロだぜ。

衛宮に帰ったらあやまらなげやな。

きつと呪いに違いない。間違いない。

アーチャーは根に持つタイプなんだ。

柳洞寺に行ってお祓いしてもらおう。

後、魔力の回復。

あそこは龍脈が通っているようで、所謂パワースポットだ。禅組んで瞑想してれば幾らか早い回復が期待できるだろう。その前にあの階段上るのは酷だが。

本日の予定を組みながら衛宮邸に舞い戻る。

ヒュン　ズサツ

「……………」

俺の足元に矢が刺さって消えた。

ヒュン　ズサツ

今度は完全に狙ってやがった。

「オイ！　コラア！！　姿を現しやがれっフニヤ　ん野郎！！」

「ククク……………」

姿を見せずに

喧嘩売ってんよね？　これ。　狩っちゃっていいよね！？

ヤンキーとの”お話し合い”で、こちとら鬱憤溜まりまくってんだ。

「そこだー！！」

ドコンッ

衛宮さんの家の瓦が何枚か爆ぜる。　ゴメンあとで直す。

あ、当たった。

ざまぁみやがれ！

「ププッ、アレくらいの魔術でダメージ食らうなんてダッサ！」

えねるぎー弾的なヤツ。ぶっ放してやった。

「覚悟はいいな？」

鷹のような鋭い目つきの赤い外套の男、その手には短剣が2本。

「上等だコラア！ Ouvrez！」

衛宮邸の庭に降り立つアーチャーと対峙。

その光景は何の冗談か？

「テメエ！ 弓使いの癖に二刀流なんてしてんじゃねえ！」

「弓使いが剣を使って何が悪い！」

「あ、男もいけますって言う意味ですか洒落てますねー！」

「きさまあああー！」

朝、騒がしいと目を覚ましてみたら、自分のサーヴァントとクラスメイトが、人間を超えた戦いをしているのだ。

「これだから女にモテぬヤツは」

「おまつ！ おまつ！ それは触れちゃならねえところだろうが！

割とどうでもいい事を罵り合いながら。

「アーチャー！ アンタ何やってるの！ 今すぐ止めなさい」

危なくなったら令呪を使っても止めないと。

「リン！ コイツは今ここで討ち果たすべきだ！」

「遠坂止めるんじゃないかねえ！！ コイツは俺の拳で躡たる！」

な、何がどうなってるの？

「セイバー、これどうなってるの？」

先に騒ぎに駆けつけていたセイバーに声をかける。

「…リン。貴女が命令したのでないのですね？」

「当たり前じゃないの！」

なんで月見里君を…。って、それにしても昨日も思ったけど人間じ

やないわね。

この間にも衛宮君の家の庭の形が刻々と変化していつている。

「私が駆けつけた時には既に」

セイバーも困惑していた。

「二人に声をかけたのですが、どうも要領得ませんでして」

何故止めてくれないかと聞けば。

私は騎士ですから正々堂々の戦いに邪魔はできませんと答えるセイバー。

それにお互いが止めるなど言っただからだそうだ。

それから聞けば、聞くに堪えない暴言罵倒の数々を繰り返し、

お互いの罵り合い。

結論、人間の領域を超えた喧嘩をしているのだ。

私、頭痛い。

「セイバーお願いよ。どっちでもいいから割と本気でぶっ飛ばしてきてくれる？」

「…リン。」

「何もいわないで」

「ぬううう!」

やるじゃないか、アーチャー。

むしろ俺がサーヴァントと渡り合えているのが異常か。
いやはや、なんだかんだと嬉しいな。

ってうわぁ。

衛宮家の庭が随分と前衛的な事になっている。

「アーチャー」

「何だ貴様の戯言は聞き飽きた」

コイツもコイツでちょっと愉しそうだな。

「ここらで分けようじゃないか。見る、この惨状」

「ふむ。私のマスターもご立腹のようだ。仕方あるまい」

お互い得物を降ろしたところで突風に仲良く吹っ飛ばされた。

その後、遠坂に正座させられ説教が足が痺れて感覚がなくなるまで続いた。

もちろんアーチャーも。

衛宮はよほど昨日疲れたのか、説教が終わっても起きてきてくれなかった。

この日、俺とアーチャーの間に何か生まれた。

「さて、それじゃあ話してもらいましょつか？」

散々、説教した挙句とつても偉そうな遠坂です。

衛宮はまだ起きてこない。

ここって衛宮さん家の居間ですよ？

まあいいけど、

「そうだな。その前に衛宮の具合は？」

「昨日のうちに傷は全部塞がりましたから問題ありません」

そうか、あいつ治癒魔法使えたのか。意外とやるじゃないの。

「ならいい。じゃあ、昨日言った”二人だけで話したい事”からしよう。もちろん聞き耳たててるアーチャーもセイバーも聞いてくれていいぞ」

居間には遠坂、霊体化したアーチャーそれにセイバー、俺。

「どっぴいっこと？」

「つまり衛宮だけには聞かせたくない話って訳だ」

「なるほどね。それで？」

「大した事じゃない、学園に仕掛けた結界は遠坂が張った物ではないな？」

もうこんな事するような奴じゃないと分っているが確認のため。

「ええ、違うわ。貴方も気付いてたのね。いえ、気付いた上での結界にちよっかい出してたのね？」

苦虫を噛んだような表情の遠坂。よほど気に食わなかったようだな。

「おう。しばらくは発動できまい。これに懲りずに基点見かけたらガンガンやっていこうと思うが、何か異論は？」

「ないわ。むしろ、悔しいけど貴方のほうがうまくやっていた」

フンツとそっぽ向く遠坂。プライド高いなコイツ。

そしてここからが衛宮に聞かせたくない話。

「で、本題だが”間桐桜”は、まほ…魔術師か？ その場合、今回の聖杯戦争の参加の有無、ひいてはあの結界の犯人の可能性、それとも他の犯人の場合、目星はあるか？ ということだ」

毎回この地で行われる聖杯戦争。その辺の事情に詳しい遠坂だ。

この街の魔術師が何人居るとか知っていそうだし、

こちらの世界の魔術師の常識を考える上で、俺には判らない事も多いからな。

俺も戦争が始まる前なら桜嬢を捨て置くのだが、事が事だけに小さな疑惑も潰しておきたい。

「　　ッ！　　そう、それも気付いたのね？　　ほんと腹が立つほど貴方は優秀なのね。でも間桐の家は魔術師の家系として落ちぶれているとあっていいの。だから彼女は強い魔術師でもないしマスターでもないわ。これは確認済み。あんな馬鹿げた結界、私だって何日もかかるもの、一日で彼女が作れるはずないわ」

「やっぱり、あの結界はサーヴァントか？」

「ええ、間違いななくサーヴァントでしょ。犯人は学校関係者が怪しいけど特定はできてないわ」

「ふむ。それはいいとして間桐桜はいつ確認したんだ？ 衛宮は昨日の晩にセイバーを召喚したんだぞ」

衛宮よりは少なくとも確立はありそうだ。

「……………」

何そのアチャーって顔。可愛いけどさ…。

これは考えてなかったな、悪いが桜嬢はグレーだな。

「マスターの目印ってのは令呪の他に何か分るものないのか？」

「無いわね」

「そうか、仕方ない。衛宮を桜嬢にけしかけるか。もしくは逆か。しかし衛宮にはれないようにするには……催眠薬か？ それとも媚薬？ その辺魔術師に効くのか……。いつそ衛宮を泥酔させて服引ん剥いたところに桜嬢を介抱させに向かわせれば……」

「アンタ、結構えげつない考えするのね」

おっといかんいかん。遠坂が若干引いてる。

「だってしょうがないだろ？ 俺が桜嬢の服引ん剥く訳にやいかなしいし、もし令呪が無ければ俺、性犯罪者になっちゃうじゃん？ その点、衛宮なら少なくとも桜嬢はあのポンコツに好意向けてるし、もしそのまま既成事実を作ってくれれば、真面目なアイツは責任取

る。奴のハーレムは潰えて一石二鳥」

「アンタを一瞬でも凄いと思った私が馬鹿だったのね。いいわ私がもう一度確認する」

「そうかい、それじゃあ一先ず、俺の懸念事項はクリアだ。あとはどうでもいいことなんだが、気絶した俺を誰がここまで運んだんだ？」

「ああ、それねアーチャーよ」

そうですか。そりゃそうだよな。薄々気付いていたが。

「ありがとうアーチャー」

どこ居るかわからんがとりあえず、俺もうお前罵ったりしない。

「ワタル、泣いているのですか？」

「え、ああ、なんでだろうね。ちくせつ」

目からしょっぱいのが……。

「さ、じゃあ私の番。まず、月見里君はこの戦争どうしようというの？」

俺の涙はスルーですね、わかります。

「随分と抽象的な質問だな。でも。衛宮がいなくてよかった質問だな。はつきり言ってどうでもいい。魔術師同士で殺し合い？ どう

ぞご勝手に。聖杯？ 誰が持つて行こうか関係ない。ただ、俺に危害を加える奴と、俺の気に入ってる奴に危害を加える奴、学園に結界を張った奴は別。特に結界張った奴は必ず張り倒す。あとは知らない誰かが聖杯戦争に巻き込まれて死んでもかまわない」

衛宮が聞いたら怒りそうだ。

あいつなら誰も犠牲にならなければいいとか思ってそうなもの。

「なっ!？」

遠坂ではなくセイバーの声。

「俺は助きたい奴しか助けないんだセイバー」

残念ながら正義のヒーロータイプの人間じゃないのだ。

「それではワタルは目の前でサーヴァントに襲われている人間が見ず知らずの者なら助けないのでですか!」

そう言ってるじゃないの。だけど、

「だから困ってるんだよ。俺の気に入った、助けたいの中に衛宮は勿論、遠坂やセイバーも入ってるんだから。あのポンコツは力は無いが正義感は一倍、危なくて放っておけない。遠坂にも傷ついて欲しくないし、もちろんセイバーにもな」

それじゃあ本格的に介入しなきゃならんだろう。

ポンコツが生き残るために手を貸さないと、きっとアイツはすべてを救いたがる。

一人で救えるのは限りがある。なら二人でもうちよっつと救おうじゃ

ないかってな。
あとは、

「遠坂、セイバー、セイバーは自分をどう思ってるかしらないが、二人は超絶美少女なんだぜ」

「……」
「……」

何で押し黙るの？ たまにこついつのあるよね？ なんで？

「美少女の損失は世界の損失だ。覚えておくといい」

「……」
「……」

これ完全に滑ってる！？ ねえ滑ってる？ 誰か教えて！

無言が心に突き刺さるの——！ ねえなんか言ってる——！

決闘？いえ喧嘩です（後書き）

いわゆるカオス

手を組みますか？（前書き）

もっと先まで行くはずだった。
どうしてこうなった。

手を組みますか？

気まずい沈黙が居間に流れる。

いつその事、罵っていたきたい。

ああ、過去に戻るなら数分前に戻って俺を止めてあげたい。

「セイバーその服どうしたんだ？」

白いブラウスに青いスカート。可愛いなあ。

「リンに頂きました」

「そうか」

会話が続きません。

仕方がない。ここはテレビでも付けて。

『 連日続いております新都におけるガス漏れ事故………』

朝のニュース。物騒な話題ばかりだ。

今日の占いとかが、今日は何の日とか、今日のカピパラとか、
そういう和み系を期待して付けたのに。

「これも今回の件と関係ありか……」

「ええ。どのマスターだか知らないけど」

しかし、何故だ？ なぜパンピーを狙う？

最初はサーヴァント同士の戦いに巻き込まれてかと思っただが、一応、聖杯戦争始まったのは昨日からということになってる。事故が起き始めたのは一週間くらい前からだ。

ああ、そうか。クラスの優位性が。

セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、あとバーサーカー。この辺は…バーサーカーは別として白兵戦すれば力がそこそこ拮抗しそうだ。

だが、アサシンは真つ向勝負向きそうもないし、そもそも暗殺者で英雄なんて強さに疑問が残る。

キャスターは魔法の腕は一流だろうが白兵戦は不向きそうだ。

そうなるよキャスター、アサシンあたりは何とか勝てるための手段を講じるよな。

なんたつて英雄によつては「その程度の魔法、効かぬわっ！」って輩もいそうだし。

そこで、勝てる環境づくり。所謂、待ちの戦術。

学園の結界とかで相手を弱体化させて叩く、陣取つて迎撃。

そんなところだろう。

で、それ作るのに結構な魔力必要となり、じゃあパンピーから頂きましょう。と。

魔力＝生命力と考えてもいいから。貯金は多いほうがいいという事か。

しかしだ、この考えも拙い。

アサシンにカテゴリされるための条件は？

生前一度でも誰かを暗殺したなら、ここに入るのか？

戦場での暗殺など日常茶飯事、王位の争いだってそうだ。そうなると大英雄だってアサシンにカテゴリされる可能性もある。

キャスターは魔術が使えるれば誰でも入るのか？

大抵の英雄は何らかの魔術使えるからここも当て嵌まる。前世の世界で魔法極めた徒手格闘最強の宰相殿も居たな。

では、クラスによる優劣はないのか？

あくまで召喚する時にそのカテゴリに入るか入らないか程度のもの
と？

いや、それが生前一番得意だったって考えるべきだな。

だが、強さの違いは英霊個人個人の力の差と考えるべきだ。

いやいやしかし、過去の英雄7人も召喚て馬鹿げてるよな。

聖杯の容量も決まっているのか。

容量が100としてセイバーは30ライダーが20、以下15、15、10、10

みたいに容量で収まるように召喚とか。

するとやはりクラス別に強さの違いが…。

もうわけわからんわ。

あ、

どこかのマスターとは違い、魔力供給さえされていればサーヴァントは疲れる事はない。

ああ、マスターがポンコツなのか。

衛宮は別として、今まで会ったサーヴァントのマスターはきちんと魔術師なのだろう。

だが、学園に結界張った馬鹿と、新都でいろいろやらかしている奴は同一人物である可能性もあるが、その限りではないと。

衛宮のように突発的にマスターになった奴もいるといことが、ソイツは完全に一般人または魔力供給できるほど魔力が無いとか。

うわっ、うちのマスターポンコツ、オワタ。

ご飯は自分で調達しろと？ ああわかりました、ダムツ。ツてことか。

一番、最悪なのは白兵戦不得意で、マスターがポンコツのキャスタ
ー！

しかも敵に魔法が効きにくいのがいる。

ええい！ ならば弾薬調達から塹壕掘りまで全てやってくれるわ！
そして引き籠って敵を迎え撃つ！ 徴発だ徴発致す！

……頑張れキャスター

可能性、

白兵戦は無理ゼツタイ引き籠ろうタイプ

ただの貯金大好きタイプ

マスターがポンコツタイプ

パンピーを狙う理由はこの辺が妥当か。

まあキャスター、アサシン、ライダーこのどれかが犯人だ。
で、キャスターが犯人の可能性が一番高いつつだけ。
そんなに深く考える事でも無かったな。

「ちよつと、月見里君聞いてる!？」

「んあ? なんだ?」

どうやらテレビ見ながらポケエ〜つとして見えてたらしい。

「貴方の聖杯戦争の考えは分ったけど、まだまだ聞きたい事がある
んだけど」

「まあ、そうだろうな。答えは質問によるけどな」

簡単に答えてあげられるものと無理なやつがあるが。

「そう、じゃあ貴方は具体的にこれからどうするの?」

「今日は柳洞寺に行ってお祓い。もとい禅でも組みにいこうかと」

「いや、今日の予定を聞いているんじゃないか?」

なんで溜息つくんだよ。軽い冗談じゃないか。

柳洞寺行くのは決定事項だが。

「それは衛宮と遠坂次第だろ。逆に遠坂は衛宮とどうするんだ？俺としては二人にはせめてバーサーカー倒す時は共闘、それまでは不可侵。くらいはして欲しいんだけど」

じゃないとバーサーカーと戦った時死ねる。

衛宮はきつと悪意のあるマスターとしか戦わん言うだろうし。実質、遠坂次第だな。

「ああ、そうよね」

「てかセイバー、お前のポンコツマスター呼んできてくれないか？じゃないと色々二度手間だ」

どんだけ寝るんだアイツ。ああ、普段ならまだ俺寝てる時間だ。

「わかりました」

セイバーが衛宮を呼びに行った。

「そっぴや、衛宮の怪我は遠坂が治したのか？」

「いいえ、違うわ。彼、治癒魔術使えたみたい。その後、気絶しちゃったけど」

「へえ意外だ」

前世では高等魔法で、才能に大きく左右された。こちらの世界では知らないが。

しばしの沈黙

「ねえ、一つ聞いていい？」

「なんだ？」

二人が来る前に聞きたいことが。

「貴方、私に告白してきたアレなんだっただの」

ああ、そんな事もありましたね。ボコボコにされましたが、これくらいなら答えてもいいか。

「遠坂に一目惚れした。じゃダメか？」

「ッ。そういうのはいいから！」

ああ、照れてくれるの？ お兄さん嬉しいです。

「そうか、…遠坂が魔術師かどうかを確認したんだ。もしOKくれたらそれはそれで嬉しかったんだけどな？」

「なっ！ あのねっ、告白と同時に抱きしめてくるって可笑しいと思わないのっ！ ってちがうちがう！ どういうことよ？」

俺もあの時テンパってたのかな。

「誰にだって魔力はあるだろ？ 魔術が使えるかは別として、俺は匂いで分る。遠坂は隠してたから匂いが分らなかった。抱きしめれ

ばちょっとくらいするかな、と。でも、見事に分らなかった。で、隠蔽してるな、遠坂は魔術師だ。って事に気付いた」

「はあ、そういうことね」

「でも魔力の匂いはしなかったけどハーブと香水の香りはした。いい匂いだったぞ」

「　　ッ！ 変態！」

しばらくして衛宮とセイバーがやってきた。

「ど、どうした、鼻血か月見里？」

ええ、強制的に。

「そうだ、お寝坊さん。見ての通り鼻血だ」

ティッシュが両鼻の穴に詰められています。

「それじゃあ今後について話しましょうか、その前に衛宮君」

おう、何事もなかったように進める貴女に感服いたす。

「な、なんだ？ あれ、何でここに遠坂が？」

うん？ こいつの記憶力はニワトリさん並なのか？

昨日、あんだだけ派手な事があってそれはないんじゃないだろうか。

「まずは昨日、どんな馬鹿したか思い出さない」

遠坂が怖いです。美人が睨みを効かすと迫力あるよね。

「……う」

衛宮の顔色が悪い。俺が気絶してから何かあったのか？

違うな。セイバーがやられそうなところに飛び込んだからか。

「思い出した？ なら少しは反省しなさい。今度やったら本当に死ぬわよ」

「何言ってるんだ、あの時はあれ以外する事なんてなかっただろ！ 大体そんな事いうなら月見里だってそうだろ」

ああ、そうだよ。そうなるよね。

だけど、普通は遠距離から援護とかするものだと思うな。

俺は人の事言えないから黙ってよ。

「コイツは異常なんだから、今は置いておきなさい」

酷いなヲイ。

黙ってよと思ったが衛宮に助け舟だしてやるか。

「確かに衛宮はもう少し考えろな？　だけど治癒魔術に自信があったから、ちよつと位の怪我ならいけると思ったんだろ？」

「え、治癒魔術？」

「お前の怪我、自分で治したんだろ？」

「え？　遠坂が治してくれたんじゃないのか？」

「む？」

「え？」

俺と遠坂の声が被る。

そして二人して顔を見合わせる。

「俺なんか変なこと言ったか？」

「どういうことだ？　衛宮自覚なし、遠坂でもない。となると、」

「セイバーが治したのか？」

「いえ、私でもありません。私もシロウかリンがおこなったものだと思いますが…」

はて？

「衛宮は宇宙人なの…か？」

「なんでそうなる!？」

細胞分裂がハンパない、超再生力を持ったエイリアン。
それはそれで面白いと思っただのに。

「見たところセイバーには自然治癒の力もあるみたいだからそれが
貴方に流れてるんじゃない？ 普通は魔術師の能力が使い魔に付与
されるんだけど、貴方の場合はサーヴァントの特殊能力が主人を助
けてるってワケ」

さすが優等生。ちょっとした間で答えを導き出すとはさすがだ！
それにしても、

「ポンコツここに極まれ。だな」

「う、うるさい」

あ、凹んだ。

「なら、余計に遠坂の言う事は聞いとくべきだぞ」

「そうよ！ 貴方が死んでしまえばセイバーだって消えちゃうのよ。
セイバーを救いたいならもっと安全な場所からできる手段を考えな
さい。……身を挺してサーヴァントを守る、はっきり言って無駄
だわ」

しかし、衛宮の気持ちも分からなくはないのだ。
だって俺も、男の子だもん。
セイバーを助けたかったんだよね士郎君は。
それで特攻してしまっただと。

「庇った訳じゃない。少しでもセイバーへの負担を減らそうとしただけだ」

「はあ」

遠坂が重い溜息。言いたい事は分る。

だが、機嫌悪くするのはやめて欲しい。

「衛宮、遠坂はお前が生き残れるよう色々と説明したんだぞ。ちょっとした解ってやれよポンコツ」

「え？」

「負けイコール死、とキチンと考えられれば、慎重な行動とつてくれるだろうと遠坂は考えてたんだよ」

「そうよ！ 衛宮くん、こういう状況でも一人で夜出歩きそうだから。脅しをかけておけ自重して、上手くいけば最後までやり過ごせるかもって思ったの」

と遠坂が続ける。ちよっとお怒りですね。

「そうか。それは気づかなかった」

そう言って頷いた後、衛宮は不思議そうに尋ねた。

「けど、どうして遠坂が怒るんだよ 俺がへマをやらかしたのは遠坂には関係ないだろ」

あーコイツ馬鹿だな。

「関係あるわよ、このわたしを一晩も心配させたんだから！」

あら、やだ可愛いわ遠坂さん。

「ねえ、俺は？俺のことも心配してくれたのかな？ねえねえ遠坂さん」

「ちよつと貴方は黙っててくれる」

ちくしょう！衛宮ばかりズルイじゃないか。

俺だって昨日、結構頑張ったのに！

なんで、衛宮が謝ったら照れてるの、ねえなんで？

よし決めた！衛宮に何か技をかけよう。

「それで、率直に訊くけど。衛宮くん、貴方これからどうするつもり？」

「正直わからない　ただ」

一息置いて衛宮が語り始める。

「マスターは皆、聖杯が狙いなんだろ？　だけど俺は聖杯になんて興味ないんだ、そんなものに命を懸けたくない。もちろん襲ってくれば戦いになるのは拒まないけど、この戦争で悪さして無関係な人を巻き込むやつがいるなら俺はそいつらを何とかしたい」

お人好しにも程があるぞ衛宮。

お前のいいところであり悪いところでもある。

献身が過ぎれば毒だぞ。

言ったところで聞かないだろうけど。

「呆れるわね。それ、自分からは戦わないけど襲われたら倒す。悪行を働くマスターは許さないってことでしょ？ 貴方、自分が矛盾してるって分ってる？」

「ああ、都合がいいのは分かってる。けど、それ以外の方針は考え付かない。こればかりはどんなに論破されても変えないからな」

「ふうん。問題点が一つあるけど、言って良いかしら？」

意地の悪い笑みを浮かべる遠坂。なんか企んでますね。

「い、いいけど、なんだよ？」

「昨日のマスターを覚えてる？ 衛宮くんと私を簡単に殺せ、とか言ってた子だけだ」

あ、俺入ってない？ 嬉しいです。
きっと俺は影が薄いから分らなかつたんだな。

「あの子、必ず私たちを殺しに来る。それは衛宮くんにも判ってると思うけど、……月見里君、貴方関係ない顔してるけど貴方が真っ先に狙われると思うわよ」

「…マジか」

そんな残酷な現実をさらりと突きつけないで頂きたい。

「あの子のサーヴァント、バーサーカーのヘラクレスは桁違いよ。」

マスターとして未熟な衛宮君にアレは撃退できない。他のマスターに聖杯を諦めさせるって言うけど、貴方は身を守る事さえ出来ないわ」

「悪かったな。けど、そういう遠坂ってアイツには勝てないんじゃないのか？」

「そうね。正面から一対一じゃ、どんな戦い方をしても勝てる可能性はかなり低いでしょうね。」

間違いないくアレは今回最強のサーヴァントよ。私もバーサーカーに襲われたら逃げ延びる手段はないわ」

「……それは俺だって同じだ。今度襲われたら、きつと次はないと思う」

俺はどうだろう？ 逃げるだけなら行けるか？

「そういうこと。解った？ 他のマスターを説得するなんて考える自分の認識が甘すぎるってコトが」

「……ああ、それは解った。けど、遠坂。お前、さっきから何を言いたいんだよ」

「もう、ここまで言ってるのに分からない？ ようするに、私と手を組まないかって言ってるの
同盟の代価ぐらいいは払うわ。マスターとしての知識も教えてあげる。
ああ、あと暇があれば衛宮くんの魔術の腕を見てあげてもいいけど、
どうっ？」

衛宮は思いつきり動揺し、黙って悩み続けた。

遠坂はやはり優しいんだな。
もっとシビアな条件かと思ってたが、衛宮の得のほう大きい気がする。

「衛宮くん？ 答え、聞かせてほしいんだけど？」

「 分かった。その話に乗るよ、遠坂。 正直、そうして貰えれば助かる」

「決まりね。それじゃ握手しましょ。とりあえず、バーサーカーを倒すまでは味方同士ってことで」

おい衛宮そこで赤くなるな。
遠坂にいじられるぞ。

「はは〜ん」

案の定、遠坂に弄られている衛宮を横目に見ながら、とりあえず二人が敵対しなくて良かったと安堵した。

さて、俺の番か。

まあ今しばらく二人の漫談見ながら、コンビニで買ってきた朝飯でも摘んでよう。

「……………モグモグ……………」

「……………」

セイバーからの視線が、むしろガン見です。

「セ、セイバー食うか？」

「いえ！ … 大丈夫です」

大丈夫のように見えん。

「まあ、そういうなこの高級クリームパンやろつ。今しばらくじやれ合いは続きそつだ。食べながら待とう」

「そこまで仰るなら！」

そうかい、そんなに食いたかったか。

こつ見るとほんとに普通の女の子だよな。

うん。熱いお茶が美味しいです。

そつだ柳洞寺へ行こう（前書き）

ある日いゝ

寺でえゝ

キヤス子に出会ゝつたあゝ

うるるん風

そくだ柳洞寺へ行こう

「じゃあ遠坂、俺の体って多少の傷はほっといても治るって事か？」

「貴方のサーヴァントの魔力を消費してね」

「なるほど、そくだったんだ」

「そついうことよ。とにかくあまり無茶はしない事」

遠坂と衛宮のやり取りは、まるで師と弟子である。

その姿はどこか懐かしく、もう色褪せたあの頃の俺のようだ。

ふと昔を思い出す。昔といっても今世ではなく、その前。

「だから！ 何度も言ってるでしょう！ 貴方の魔法構築はデタラメなのです。

大体なんですか気合って、それで魔法が発動するのはアナタだけです！

すべての魔法師に喧嘩売っているのですか！ 今一度説明しますよ

「

銀色の髪を束ねた年の頃は二十代の中盤くらい、

胸は少々物足りないがウエストはキュッと締まり絶妙なスタイル。

美の完成型といっても過言ではないほどの美女。

「そうは言うが、これで発動してるのだ。そこまで躍起にならなくていいのでは」

「よくありません！」

魔法発動するのだから構築だとか詠唱だとか、それでいいとは思っただが、

彼女は理論がしっかりしていないと駄目といい、日夜俺の魔法基礎矯正に勤しんでたな。

結局、根負けして基礎叩き込まれてその時以上に魔法師としての腕が上がったのだから感謝した。

「やれば出来るじゃないですか」

きちんと基礎が出来た時に、

出来の悪い子供がようやく様になったと、とても嬉しそうに笑っていた。

俺が病に伏せ、そろそろかという時も長命種ゆえに姿は寸分違わぬ美女のままだったな。

どうにか延命させようと裏でコソコソ怪しげな実験してたのは知ってたが、

旧来の側近達がその実験に付き合わされてゲッソリしてた。

実験の成果の薬はクソマズイだけで何の効果もなかったなあ。

徐々に色褪せ忘却される記憶の中で確かに輝く日々があったのを忘れない。

「ワタル、どうしたのですか？」

「なに微笑ましいというか、懐かしい感慨というのが近いかな」

セイバーによつて意識が戻される。

そして遠坂教授の講義も終わつたらしい。

「それじゃあ、月見里君の番だけど」

「ああ。まあ同盟については俺も噛ませて貰つて良いんだらうか」

「それは勿論。でも本当にいいの？ 私たちにはサーヴァントがいるけど貴方は生身なのよ？」

まあ確かに宝具使われたら死ぬるかも。

「今さらだな。バーサーカーのマスターに真つ先に狙われるのは俺といったのは遠坂だろ。それに二人とも放つておけないからな」

「本当にいいのか」

「良いんだよ。俺が決めたことだ。それよりお前が無茶しないかが心配だよ」

「そっか。月見里が居てくれると心強いな」

よせやい照れるじゃないか。

「おう。任せとけ！ じゃ、俺とりあえず帰るわ」

「いらいら、待ちなさい」

中腰状態で遠坂に止められた。仕方ない座りなおす。

「はて？ 何でしょう」

「フフ、分つてて言ってるわよね？」

やはりそうなるよね。さて、本当にどこまで話すべきか？

全部話しても問題はないだろうが、要らぬ情報を与えて今後、ややこしい事に巻き込まれるのはよろしくない。

嘘と真実を織り交せて話すのが一番か。

「あいよ。何が聞きたいのかな？ まあ、巻き込まれた身だが、色々と説明してもらった恩もある。ある程度なら答えましょう」

目を細めて俺を伺う遠坂。得物の物色ですか？

違う意味での食べられるならいつでも歓迎ですよ。

「え、どういうことだ？ 月見里は何か隠しておきたい事があるのか？」

衛宮にはまだ腹芸は無理だな。

「当たり前だろ。初キッスはいつだとか、初恋は誰だとか、そっい

うのはずつと胸に秘めておきたいだろうが。俺に言わせるだけなんて酷い」

よよよ、とどこかの虎っぽく泣き真似してみせる。

「茶化さないでくれるかしら。そう等価交換ってわけね。いいわ」

「まあ、そんな大それたもの持ってないけどな。で何から聞きたい？」

けっこう大きな秘密もってますが。

「じゃあ、まずは貴方が使う魔術について」

「あいよ。得意なのって事だと、占星術とか付加魔術、セイバーが魔力纏わせて戦ってたアレな。扱っただけならオーソドックスなもの一通り。」

これくらいなら見返りはいらさないぞ」

オーソドックスって言ったのは前世だと四大元素とか五大元素とか呼び方がマチマチでこっちの世界ではどういいう言い方だか知らないからだ。

「そう、私の扱う魔術も教えてあげる。遠坂は代々、力の転換が得意よ。私も五大元素は扱える」

先に恩を売って質問に答え易くさせるためか、ただのお人よしか。しかし五大元素ね。かしこさが1あがった。

「なあ、二人ともそういうの俺が聞いててもいいのか？」

衛宮は律儀者ですな。

「そういえばそうだが、遠坂の場合はこれから仮にも師匠的な立場になるんだからいいんじゃない？ 俺の場合はなんだ、衛宮は等価交換も値しない？ どうしてもってなら衛宮の得意魔術も教えてくれていいぞ」

「さらりと傷つく事いわれてる気がする…俺が得意なのは強化魔術」
「またマイナーなもの扱うのね。でも、衛宮君はこれからも魔術師として生きていくなら少しくらい腹の探りあい覚えたほうがいいかも。だから、聞いててもらっていいわ」

「何事も勉強という事だね士郎君」

俺も実は偉そうな事言えないんだけど、この世界の魔術の基礎とか知りませんから。
遠坂さんの情報提供が頼りなのです。

「さて、次の質問は？」

こちらから質問するのではなく相手からの質問待ち、
一見向こうに主導権があるように見えるがそうとも言えない。
答えたくない質問は答えなきゃいいのだ。
逆にこちらが質問して、見返りに何々教えなさいとなるとマズイ。

「じゃあ、貴方の家は魔術師の家系？」

「違うよ。一般庶民です。次の質問どうぞー」

「どこで魔術を？」

「それさ、答えたとして俺は遠坂から何を聞けるんだ？遠坂は”代々”ってさつき言ってたし戦争の説明の時も、魔術師の家系的なことを言ってたから同じ質問の答えはこちらはもう得てるわけだが」

「むう」

腕組んで考えちゃったな。

まあその辺は嘘を交えて教えるつもりだが。

「わりいわりい答えるよ。ちょっと意地悪だったな。等価交換も忘れていい」

「え、いいの？」

これでやり易くなった。

「ああ、特に隠す事でもないし遠坂の事も衛宮の事も信用してるからな」

ゴメン。隠すとこ隠します。

「ええと、じゃあどこから話すか。まずは」

魔術の師はこの国の人じゃない（異世界の人だから嘘ではない）
その人が近所に住んでて教えてもらった（近所には住んでないから嘘）

普通は教えないらしいが俺には才能があったから教えた（半分、本

当)

教えてもらったのはこっちに来る前まで(冬木というか今世の前で意味じゃ本当)

大雑把な人で理論や扱い方は教えてくれたが魔術名など適当だった(大嘘)

「というような感じだな。だからイマイチ魔術と魔法の違いとかも分らないし気にするなといわれたから気にしてない。偶に変な名前前で魔術使う場合もある」

これで俺の捏造設定完了。

「そう。でもそれだけだと説明できない事があるんだけど……」

「サーヴァントと戦える件か？」

これにもそれっぽい答え用意してます。

「そう。そこよ！いくら才能があつて魔力が多いつていつてもあくまで人間のレベルなのよ。サーヴァント渡り合うのは無理」

「それは理解してる。だから最初にある程度なら答えましようつて言つたる？ 今から言う事は推測であつて答えじゃないし拙いところもあるが聞くか？」

黙つて頷く二人。いや三人。

「俺は子供の頃つてメツチャ体弱くて何度も死に掛けていたらしい。それで野菜人の如く死にかける度に魔力量が多くなつたんじゃないかなろうかと。魔力を発するもの魔力の痕跡とかそういうの知らずに滅

茶苦茶敏感になつてたようでそれに惹かれて師のそこを幼いながらも行つたんじゃないか？ で、才能が開花したと。今回の戦争始まるちよつと前から凄くパワーアップしてるんだが俺の魂のあり方が半分霊化してて何らかの影響を聖杯から受けてるとか？ 武器の剣に關しては使い魔を、あ、この場合はサーヴァントじゃなくてネズミとかカラスとか、な。召喚しようとおもつたらアレが出てきた。聖杯の何らかの誤作動でどっかの英雄の宝具だけ召喚できちゃったとか？ 召喚した日も衛宮が襲われるちよつと前のことだからありえないとはいえないだろ。戦闘が行えちゃったのは武器からの本来の持ち主の経験とか扱い方がフィードバックされてるんじゃないだろうか。俺の推測はこんなところ」

いかがでしょうか？ 何かソレっぽくない？

「そつか、でもそうすると…」

遠坂さん思考の海へダイブしました。

こっちはそれで勝手に解釈していただければ助かります。

その後、勝手に納得していただいた遠坂さんに魔術と魔法の違いとか、変にならない程度で基礎的なことを聞いたがおおよそ前と変わりはないようだ。

後は協会とかあるらしいから今後はその辺対策だな。

「協力関係になつたからって間違わないでね」

「 わたしを人間と見ないほうが楽よ、衛宮くん」

と捨て台詞を吐いて出て行った。

遠坂こそ本当にそんな事できるんだろうか？

甚だ疑問に残るが今考えても仕方がないことだ。

「さて、んじゃ俺も帰るかな」

ああ、寺行くんだった。アーチャーと馬鹿やったから魔力が枯渇寸前なんだ。

「わかった。月見里、その、これから宜しくな」

スツと手を差し出す衛宮。

その手をパチンと払いのける。

「か、勘違いしないでよね！ アンタが心配なんじゃなくてセイバ―が心配なだけなんだからね！」

「それでも宜しくな」

再度手を差し伸べる衛宮。

「俺の渾身のボケをつぶすなよ……」

悲しくなってくるだろうが。衛宮はこういう奴だったな。

「わかったわかった。んじゃ行くわ。セイバー、ポンコツが無茶しないように頼むな？」

「はい。ワタルもお気をつけて」

それでも、きつと衛宮はまた無茶するんだろっなと思いつながら、衛宮邸を後にした。

長い長い石段。

毎度思うが柳洞寺の倅は毎日これを上り下りしているというのだから、

ご苦勞な事である。

ようやくお山の上の寺の山門が見えた。

夏なら登るだけで大汗掻くな。

この山は霊山というのに相応しく、空気が非常に良い。普通の人間にも、それ以上に魔力を持つものにとっても。

「はて？」

山門に到着し些か違和感を覚える。

「自縛霊の類か？ ふゝむ」

そんな事考えながらも、その辺のものはここは入れないだろうな。と考え直し、山門くぐる前に一度合掌、「成仏せい！」と一言かけて境内に足を踏み入れると、なんか色々やばそうな雰囲気だった。

「……………」

こりゃ、誰かが籠城しているか。

もちろん人間じゃなくてサーヴァント。

ここに満ちている”気”というか”魔素”があんまりいい感じじゃないな。

強制的にどっかから持ってきたか

さてさて、まずい状況だ。

でも俺、サーヴァントじゃないから平気か？

しかしマスターではないが、魔術は使える。

常日頃から、一般人よりちょっと多い程度の魔力に隠蔽はしている。遠坂は気付かなかったが、このマスターやサーヴァントが気付く可能性はある。

何せよ、監視されているとしたらこのまま帰ったら逆に怪しまれないか。

とりあえず、本堂に向かうか？ それとも形振り構わず逃げるか。

「ぬぬ、人生とは選択の連続である」

ここで、選択ミスると死亡フラグまっしぐらな気がする。

「どうした航君？ 道に迷い説教でも聞きに来たか」

「ああ、こんちわ零観さん。道は迷うからこそ色々な物が見れて嬉しい。ゆえに説教は結構です」

この人物、我等が生徒会長、柳洞一成の兄で名を柳洞零観^{じゅうとう ぜいかん}。弟とは真逆な性格をしている生臭坊主だ。

「はっはっは、これは一本取られた。相変わらず可愛げがないな君。では一成に用かね？」

男に可愛げをもとめちゃイカン。第一、こちらは一度人生を全うした身です。

内面的にはそんなもん生まれた時から持ち合わせちゃいない。

「いや、禅を組みに」

しまった。何で今まで気にしてなかったんだ。

柳洞が変な暗示かけられてたのに気付くべきだった。

「そうか。若いのに殊勝な心がけ、うむうむ。では本堂に案内しよう。ゆっくりしていきなさい」

「うい」

あわよくば、マスターとサーヴァントの顔を拝んで、
こっちが狙われてるようであれば、まあ、頑張って逃げよう。
今は魔力が足りないから戦闘は無理だ。

本堂の縁側で禅を組み瞑想する。

風を頬に感じ、陽光が体を温める。

全ての感覚を内へ内へと導き。

至は無我

どれだけ経ったか。

徐々に徐々に外に感覚を広げていく。

すうっと目を開けば、太陽が西に傾き、空が赤く染まっていた。

結局、何事もなかったな。

と、思ったんだがそうでもないようだ。

「柳洞、何してんだ？」

隣で同じように禅を組んでる奴がいた。

「む、何とは何だ。生徒会の所用から帰ってきたと思ったら、友人が禅を組んでいるではないか。邪魔するのは忍びないと俺も付き合っ
てやったというのに薄情な奴だ」

「そうか。別に声をかけてくれても良かったんだが」

「いや、お前の禅は見習うところが多い故な」

俺もまだまだ未熟だとナンヤラカンヤラと長々話し出すので、途中から耳の右から左へと聞き流す。

「寺の倅にそう言って貰うと俺も中々様になってるようだな」

「うむ。普段の生活態度が信じられぬ程にな。どれ茶でも馳走しよう」
「う」

「いや、もう帰るよ。の前に廁だけ借りて行くわ」

「そうか」

ふうースッキリ。

魔力もそこそこ回復したか？
さて、柳洞に一言かけて帰りましょう。

「あの別嬪さんは……」

修行僧の多いこの柳洞寺に女性が居る事は極めて珍しい。

それもすげー美人さんときた、人間じゃないけど。

厠から柳洞のところに戻るとき水汲みしている女性を発見した。
お互いの存在に気付いて軽く頭を下げたが。

こちらの存在に気付いているのか？ それとも
仕掛けてこないなら、今はいいか。

「おい、柳洞よ。別嬪さんが水汲みしていたぞ？」

「ああ、宗一郎兄の許婚だな。近々、祝言をあげる予定だ」

宗一郎というのは我等が2年A組担任教師 葛木宗一郎（なつむぎ けむり）の事。

「……………」

沸々と怒りが沸いてきますぜ。

「どうした？ 月見里」

「どうした、だと！？ 生徒を蔑ろにして自分だけ乳繰り合う、も
とい幸せになろうとは教師の風上にも置けん！」

くっそ！ 葛木めっ！ スカした顔しやがって毎晩毎晩、己の如意
棒を使って

アンな事やイヤな事しやがって！

「月見里よ、それは単に僻みではないのか？ 宗一郎兄は生徒を蔑ろにするような」

「うるせっ！ 帰る！」

柳洞の話を遮り、俺は柳洞寺を後にした。

心の中で、

葛木もげる葛木もげる葛木もげる葛木もげる葛木もげる

何度も繰り返した。

英雄の条件とは(前書き)

あけましておめでとういっせいでます。

英雄の条件とは

「エミヤもくくん!!」

「ど、どうした月…じゃなっ！ 靴脱げ！」

衛宮邸居間に乱入。そろそろ夕飯時。
柳洞寺から直接来ました。

「エミヤもん！ 俺にも可愛い女子を召喚してよ！ てか、してください」

「む、無茶言うなよ。それより靴脱げ！」

「大丈夫！ お前ならやれる！ さあ、やってみよう！ てかヤレッ！」

「無理だつて！ いいから靴をぬげっ！」

「ああ、脱ぐさ！ 脱げばいいんだろ！ ガツテム！ これで、アサシンかライダーのサーヴァントが別嬪さんなら俺は…、俺は、俺は…！」

あれ、目の前が暗く……。

「っ、月見里？」

「シロウ、ワタルが息をしません」

「オイ、ヤマナシィー！ー！！」

はっ！？ 興奮のあまり意識が飛んだようだ。

「ワタル！ 大丈夫ですか？」

「セイバーか、ちょっと興奮し過ぎた。反省している」

なんかセイバーを見たらどうでも良くなってきた。

だいたい柳洞寺にいたアレがキャスターって決まった訳じゃないじゃないか。

でも雰囲気が前世のアイツに似てるし、キャスターでいいか。

まあ、いいや。マスターじゃない俺が単独でどうこうしようなんて無意味だし。

情報だけ渡して、後は衛宮たちに任せよう。

でも、柳洞寺で一戦かます時は同行して、担任の先生を完膚なきまでにある部分を

再起不能に叩きのめす。

「どうしたのですかワタル？」

じっとセイバーを見つめている。そして見つめられている。

「何しに来たんだお前は？」

衛宮の声は今聞こえない。

「そうか分ったぞ！ セイバーのアホ毛は宝具なんだ！」

効果はマイナスイオン発生萌えである！

俺の言葉にセイバーのアホ毛が反応を示す。

どういう仕組みになっているのか非常に気になるところだ。

「いえ、これは宝具ではありませんが……」

「だから何しに来たんだよ！」

「あ、衛宮居たのか」

「……、俺の家！」

「そうか、細かいな衛宮」

「細かくない！」

「そんな事より晩飯まだ？」

そろそろご飯の時間だと思う。うん。

ぼくあ、お腹が空いてますよ。

「はあ。遠坂といいお前といいどうして人の話ちゃんと聞かないんだ」

「遠坂がどうかしたのか？」

あいつ帰ったよな？

「……バーサーカー倒すまではここに住むってさ」

え？ 今なんと仰いましたか？

遠坂がここに住むって言ったよな？

衛宮のハーレム計画断固阻止である！

間桐桜、セイバー、そこに遠坂までだと！？

いかんよ、それはあまりにもいかんよ。

「あいわかった。某も三食昼寝付きでここに住むでござる。異論は認めない」

「ワタル。それはあまりにも羨ま……駄目人間です」

セイバー今ちよつと本音が漏れたぞ。

「昼寝付きは兎も角、月見里君も一緒って言うのは悪くないわね。そのほうが合理的だし」

遠坂さん登場。

まるで家主のような態度は流石といえよう。

「はあ。もう好きにしてくれ」

「じゃあ今日からお世話になります衛宮の旦那。早速ですがご飯まだ？」

「…はあ」

そんなに溜息ばかりついていると幸せが逃げるぞ衛宮。

相変わらず衛宮の作る飯はうまい。

衛宮が自作してくる弁当のオカズをめぐりクラスの男子が争った事があった。

を平らげ、

何か途中飯作る当番がどうか言っていた気がするがスルーしておいた。

俺は作らない。衛宮より旨い物を作れるというなら別だが、態々味を落とす必要ない。

決して面倒だからではない多分。
明日は遠坂が何か作るらしい。

「それじゃあ休める時に休む事。おやすみなさい」

「うい。おやすみ」

遠坂が部屋に戻っていくのを見送りながら、もう一方の言い合いを眺める。

あいつ逃げやがったな。

「駄目だ！ 絶対駄目！」

「何故ですか！ 万が一にもマスターが襲われた場合」

一緒の部屋に寝る寝ないで揉めているセイバーと衛宮。なんて羨ましい。だが、衛宮は初心なので断っている。

じゃあ俺と一緒にと言ったら「貴方はマスターではないし自力で何とかできます！」

だつてさチクショウ。

「セイバーは女の子なんだから」

「サーヴァントに性別など」

そこからエンドレスに話が平行線。

この話し終わらないと俺どこで寝ればいいかわかんねえからな。助けてやるか。

「セイバー、解つてやりなさい。衛宮も年頃の男の子なんだ。いくらサーヴァントとはいえ他人が見てる前で色々息抜きできないだろ？」

ビ二本とか、AV観たり、セガレイジリとかさ。

「月見里。お、おまえ何か勘違いしてるぞ！」

「大丈夫だ衛宮。皆そうなんだ」

恥ずかしがる事ない。この年代はパッションが滾ってるから仕方ないのだ。

「その悟ったような目やめろ」

「……すみませんシロウ、配慮が足りませんでした」

衛宮から顔を逸らすセイバー。

「セ、セイバー！？ 違う違うぞ！」

「シロウ、部屋は隣で大丈夫です」

「ちよ、なんで目逸らしながら！？」

「いいから衛宮俺の泊る部屋に案内せい」

不満顔の衛宮を連れ居間を出る。

さあ、今日はもう終いです。おやすみなさい。

夢を見ている。

懐かしく遠いどこか戦場を駆けていた頃。

戦に勝利し野営地にて馬鹿騒ぎをしている仲間を見ながら、安酒を煽る。

この日は決意の日。

銀に輝く三日月の下、篝火が焚かれ多くの陣幕に喧騒が響き渡っている。

「どうしたのですか？ 何時もなら貴方はあの騒ぎの中心でしょう？」

銀月映える銀髪の絶世の美女は、その細い腰に手を当てて困った子を見るような目で俺に語りかけた。名をベルナデット。

冒険者として駆け出して間もない頃出会ったエルフ族の女性。

「昼間の事を少し…な」

「あの女の子のことですか？ 傷は治しましたが、心までは…」

「…そうか」

戦場ではよくある話だ。

戦の大勢は決し、追撃戦に移行。敗軍を追いながらの事。

一つの村が敗軍によって焼かれていた。

男は殺され、女は犯され殺され、
生き残った連中も目は虚ろ、何も光を写してはいない。

そこに一人の少女がいた。

獣人の娘。

父も母も殺されていたが両親の亡骸の前に蹲っていた。

少女自身も服は裂け雄の臭いが染み付き、体中に切り傷。

何より痛々しかったのは獣人族特有の獣の耳の尻尾が切り裂かれていた事。

少女は俺を見て怯えた。

人族の俺を見て…。

戦場ではよくある話だ。

「この世界には多くの種族がいるが何故、俺たち人族と呼ばれる連中は他種族を見下すんだらうな」

地域や小さな村、もとより他種族が住んでいた地はそれほどでもないが、

人族は他種族を見下し、過酷な労働を課し、気にいれば奴隷に。

なんとも浅ましい。

「其れが人族の性と言ってしまえば、それで終わりでしょう。かく言う私も何度も襲われそうになりましたし。貴方のような考えをしている人が稀なのです。

ですが、そんな貴方だからこそ、いろんな者たちが集まり傭兵団かぞくが出来たのです」

「そうか」

何故、言葉を紡ぎ理解し合える相手であるのに、一方的に蔑むことができよう？

生まれ育った地、肌、瞳、髪色、違いが何だと言っつのだ。

「楽しい世界じゃない…な」

「そうかもしれませんね。ただ貴方らしくありませんよ？ 貴方が迷えば傭兵団かぞくが迷います」

「…そうだな」

なら、俺は俺である為に、できる事をすればいい。

「今、滅びの道を進んでいる国はどこだ？」

「はあ？ 敗戦濃厚という意味でなら、ここより北のレンヌか南西のノーブルリールでしょうね」

「そこそこの国力があると、なお望ましい」

「なら南西のノーブルリール」

「次の目的地はそこだ。……ベル、俺は俺の国を作るぞ」

「わかりました」

呆気なく答えたベルナデット。これっぽちも間がない。

「……もつと呆れられると思ったんだが？」

「貴方が作る国なら見てみたい。と以前から思っていました。可笑しいでしょうか？」

長命種というのは総じて頭がいいといわれるが、

この時ほど本当にそうなのかと疑ったことはない。

なんせ、一介の冒険者から傭兵団の団長までにはなったが所詮は平民である。

俺は本気で王になろうとしていたが、その過程は過酷で遙か遠く険しい道だ。

それを付いていくとまで言うのだからそう思わざるえない。

「ああ、最高に可笑しいな同時にその気持ち嬉しく思う。だが、これより進む道は今以上に俺は傭兵団かぞくを何人も死に追いやる。それでもなお、付いてくるというなら俺の夢に付き合せた以上、俺は最後まで止まらんし後悔はせんぞ」

その道が血塗れようと俺が理想とする俺の国を作り上げよう。それがきつと俺の思う楽しい世界に変わる筈だから。

「はい、何処までもお供します」

ベルナデットの微笑を横目にジヨッキを銀月に掲げ一気に残りの酒を煽った。

「……」

また懐かしいものを見たな。

まだまだ朝には早く、天上の月が障子の襖から見える。

衛宮の部屋の近くではあるが、俺が起きても起こすことはないだろう。

ちよつと外の空気でも吸って来よう。

前衛的になつた衛宮邸の庭に出て月を見上げる。

果たして最近、頻繁に見る夢に理由はあるのだろうか？

もし理由があるとすれば聖杯戦争に深く関わりがあるのだろうか。

聖杯戦争とは一体なんなのだろうか。

願いを叶える願望器を巡る魔術師同士の戦い。

そもそも聖杯を分け合う事ができるなら戦争にさえ発展しないのだ。人間というのはどこへ行つても変わらないな。

その人間の中でもとりわけ英雄というのが罪深い存在だが、英雄という自覚はないが俺もそうだったのだろうか。

セイバーやアーチャーも生前の偉業を成し英霊の座に付いたという

わけだが…、

生前の偉業ねえ……。

要はどれだけ敵を殺したかということだ。

勿論、善政を敷いて国を富ませるのも英雄といえようだが、

ホメロスの叙事詩に、自由な戦士団の指導者としての英雄が活躍するところから、

ヨーロッパにおいて叙事詩の背景をなす時代を英雄時代とさしていた。

英雄は戦があつてこそ英雄なのだ。

殺して血に濡れ、それでもまた殺して、その先には英霊の座とか言うわけのわからないものが待っている。それに縛られて彼らは何を思っているのだろうか。

遠坂の話聞き流し程度だが人類の救済が彼らの責。

それは一体どうということなのか？

俺が考えても仕方がないことではあるが、考えるだけでゲンナリしてくる。

人類の救済、天災を除いて自ら破滅に向かうのが人類。

自ら馬鹿やって自分達にはどうにも出来なくなつてそこに英霊登場つてことだろ。

便利屋かよ…、そして後始末。

戦争ならどっちかに肩入れしてとっと終わらすとかそんな感じだろうか。

英霊という存在にも自我があるのだ耐えられないぞ普通は。それとも、その辺の感情はカットされているのか……、
…待てよ？ 通常は自我など無いのかもしれない。
そうすると聖杯戦争って言うのが特別なのか。

何にせよ、この戦争を考えた奴はイカレている。

そこまでして叶えたいモノとは一体何だったのだろうか？

想像はつかないが、どうせ大した事じゃない。

だが、サーヴァントは何を求めるのだろうか？

推測の域を出ないが自我ができるこの戦争で求めるのは何か？

もう一度は死んでいるのだ。

……再び、生を得るとか？

駄目だ、分らん。なら聞けばいいか。

「おいアーチャー。その辺にいるんだろ？」

俺の呼びかけに応え、姿を現す赤い外套の男。

「何か用かね？」

「ちょっと聞きたいことがな」

「フム、私と君はいずれ敵同士になるのだが」

あんまり際どい事聞くと遠坂に怒られるってか？
そんなタマじゃないだろうに。

「別にお前の真名が聞きたいとかじゃねえよ。ただ、聖杯にお前は
いや、サーヴァントは何を望むのかと」

「他のサーヴァントは知らぬが……私には特には何も無いさ。どう
しても拳げるといふなら……恒久的な平和なんてどうだ？ もっと
もマスターには否定されたがね」

両腕組んでこちらを片目で見るアーチャー。
遠坂なら否定したって分るわ。

「そんなもんか」

サーヴァントも願いがあるから召喚に応じたというわけでもないの
か。

「……フム。恒久的な平和は否定しないのかね？」

「確かに何事にも争わないというのは酷くつまらなそうな世界だな
」

平和とは戦争だけではなく心配事や揉め事もないことも指すのだか
ら、

要は競う事もしないということになるので退屈だろう。
きっと進化が止まるだろう。

「だが、本当にそれを望んでいるのならそれはそれでいいと思うぞ？ 人の夢や理想などそれぞれ形が違うのだから」

ただ、とてもそう望んでいるようには見えないが、
きつと生前それを理解した、してしまったのだろう。

このアーチャー付き合いはほんと短いが捻くれているがわかる。
どこか思つようにいなくて癩癩を起している子供に似ている。

「……………」

「まあなんだ、生きるということは理想や夢の押し付け合いだ。それに折り合いを付けていくのが人間であり、理解できないなら相手を力で屈服させる。理想や夢を叶えたいなら力を付ける他にない。結局は力のあるものが勝つのが世の道理だ」

なんで過去の英雄相手に俺は偉そうに説教たれているのだろうか。

「…そうか。君は強い人間なのだな」

「どうだろうな…。というか、英雄に言われてもなあ」

「いや私は…何でもない。少々喋り過ぎた」

そのまま、姿を消すアーチャー。

消える寸前に見えたその顔に影が見えた。

「とても英雄には見えんな」

暫く空に浮かぶ月を眺めながらそんな言葉を呟いた。

美綴さん危機一髪？

今、新都にある女子に人気な喫茶店に学園一の美少女といる。

傍から見れば学生のデートと見れるだろうが、そんな甘いものではないといっておこう。

「好きな物頼んでいいとは言ったが遠慮ないな…」

ハーブティーだか何だか知らないが洒落た飲み物とケーキのセットがテーブルに並ぶ。

ちなみに俺が食うわけじゃなく、

「いいじゃない。男に二言はないんでしょ？」

遠坂に奢る羽目になった訳だが。

「まっ、学園一の美少女とデートが出来たと思えば安いものか」

「ッ！ ……貴方、前から思ってたけど、よく平気な顔でそういう事言えるわねえ」

「きっと俺の前世は南イタリアあたりの陽気なイケメンだったのだろっ」

全然違うけど、違う世界で王様やってましたから。

でも確かに、この国の男はそういうこと口にするの奴は多くないよな。

「何かそんな気がしてきたわ……」

さて、どうして俺が遠坂と喫茶店で茶をシバいているかというところの始まりは昼頃。

今日も新都の方で『ガス漏れ事故』と朝のニュースが流れ、遠坂は調査という事で新都へ。

衛宮は藤村タイガー「ワレ、昼飯持ってこいやあ」と呼び出しくらい学園へ。

セイバーさんもそれについて行った。

そういえば昼食は遠坂プレゼンツの中華であったが、なかなかいけてた。

俺はバイトと買出しの為、新都へ赴いたわけだが。

「ナツシー今日はもう上がっていいよ」

大して働いてもいないのにネコさんにウィスキーと一緒に追い出されたのだ。

なんで酒を渡されたかは不明だが頂けるものは頂いておいた。

その後、新都で日用品の買出ししていたところに遠坂に遭遇し、そのまま合流。

他のマスター探ししつつ、

「この流れ、どうやら柳洞寺の方に向かっていているようね……」

新都から寺の山の方へ魔力の流れる道のようなものができている。

「……そのようだな。そういや、キャスターのサーヴァントっぽいのが柳洞寺にいるな」

「は！？ アンタそれ本当！ 何で言わないのよ！」

「言い忘れてた。クラスは分らないが、まず間違はなくサーヴァントだ。境内が魔力で満ち溢れてたのもキャスター独自の魔術じゃないかと」

「言い忘れてたって…そんな事言い忘れないでよ！」

と何気なく衝撃発言の俺にご立腹。

ガーガー咆えていらっしやいました。

というわけで、お詫びを込めて喫茶店の流れとなったわけだが。

「それで、マスターは？」

「そこまでは、な。怪しいのは俺らの担任」

そのサーヴァントに操られていたりしてなければだが…。

表向き我等が担任をマスターに任せ、

裏は別に本当のマスターがいるのかも有り得るが…。

「葛木先生が？」

「ああ。順を追って話すか…、葛木が柳洞寺に住んでは知っているのか？」

「ええ」

「そうか、昨日俺は柳洞寺に行った。そこで境内の異変に気付いたが、まあそれは置いておいて、見知らぬ女性が寺で水汲みしてるじゃないか、しかも人間には思えない魔力の塊みたいなのが、

で、柳洞にあれ誰と聞けば葛木の婚約者の答えやがる」

思い出しただけでムカついて来た。

「……貴方よく無事に戻って来れたわね」

遠坂が呆れながら呟く。

「まあ俺、マスターじゃないしな。魔力もかなり消耗してたから、普通の人間に見えたんじゃないか？ 今だってまだ7割くらいか

」

勿論、隠蔽しているから並の人間よりちょっと多いかな？ くらいにしか、
分らないはずだ。

「そんなわけで、葛木が怪しい。という俺の推測。因みに遠坂を毛嫌いしている生徒会長は限りなくシロに近い」

「それ、何の根拠があるわけ？」

「どっちのだ？ 遠坂を毛嫌いしてる方か？ 限りなくシロの理由か？」

柳洞の遠坂嫌いは結構有名だと思うが、本人も知っていると思うのだが。

「シロの理由の方に決まってるでしょ！」

そんなに声を荒げなくても、意外と嫌われてる事気にしているのか？

「声でかいよ遠坂。……アイツには暗示の類の呪術がかけられてたからな」

ハツと我に返り、まわりを見渡す遠坂。

俺もコーヒーを口に運ぶ。

「え、はあ!？」

だから声でかいって、そんなに驚く事なのか？

「発動条件は分らなかったが、かかったた暗示は上書きしといたから大丈夫だぞ？」

「……………」

何故、そんなに睨みつける？

「…貴方…いいえ、サーヴァントと戦える時点で常識を持ち出すのが間違ってたわ」

何を勝手に納得してるんだが知らないが、呆れる遠坂。

「まあいいけど、そんな訳だから柳洞は限りなくシロって事だ」

自分がマスターなら、あんな暗示自分自身にかけないだろうし、俺が上書きした時に気付くだろう。

最悪、衛宮あたりに頼んで柳洞の服を脱がして令呪の有無を確認だな。

「なるほどね。確かに柳洞君は除外しても平気そうね」

「それより新都から魔力の吸い上げしているが、それをどうするか、邪魔は出来るが、流れがちょっとだけ悪くなる程度の嫌がらせしか出来ないぞ？」

それでもあんまり効果は期待できないが。

龍脈を使っている以上、人の力で山や川の形や流れを変えるようなものだ。

超頑張っても幅の広い川に大きめの石を2個3個投げ込むくらいのイメージだ。

労力に見合う結果が得られるとは思わない。

寺のサーヴァントに最低限の良心でもあるのか謎の所だが未だ死人が出てないのが幸いか。

「ええ、そうね。そっちはお手上げね。だけど、まだ他にもマスターがいるかもしれないし、私はもう少し探索続けるけど月見里君はどうする？」

「まだちょっと買出しがあるからそれ終わったら俺も俺で動いてみるわ」

「そう。…あとずっと思ってたけどソレ何？」

俺の買出しした物を指す遠坂。

「何って歯ブラシとか寝間着とか覆面とかの日用品だ」

買い物袋から馬面が覗いている。覆面というより被り物か？

「日用品のカテゴリに覆面が入っている貴方はどうかしているわ」

「フッフッフツ、分っていないな遠坂。いいだろう、ならば俺の秘密を一つ教えよう」

そう、何を隠そう、

「学園の七不思議の一つ、間桐を襲う謎の覆面男とは俺の事だ！」

効果音があるなら間違いなく俺の背景で爆発が起こっているハズだ。

「な、なんですってー！？　っていつかー！！　そんな七不思議初めて聞いたわよ！」

普段、猫を被っている遠坂が席から立ち上がり素で吼える。

俗にいうノリツッコミだ。

さつきから周囲の目が結構気になりますよ俺は。

「まあ落ち着きなさい。男子の間では結構有名なんだけどなあ、俺もまだまだだったか」

もっと人目に付くところ且つ、逃走し易い場所を選ぶべきだな。

「はっ！？　いけない、いけないわ私。しっかりするんだ遠坂凜」

なかなか面白いなコイツ。

普段、真面目に優等生しているから余計に人間味というか本来の遠

坂が見れた気がするな。

「ほいじゃ、一足先に買出しに戻るわ。また後でな」

ウーウー悩んでいる遠坂を置いて店を出る。

もちろん勘定は済ませました。

「さてと、帰るか」

けたたましいサイレンの音が近付いてくる。

買出しを済ませ、新都にあるビルの一つ。

なにやら不穏な空気を感じて入ってみれば、廊下に広がるのは何かの骨の群れ。

ガシャガシャと骨同士がぶつかる音を立てて近付いてくる髑髏戦士（仮名）を見たときは、

軽くホラーでビビッタのは秘密。

ここは剣を使わず、魔術を使って片付けた。

一体一体倒すんじゃ時間が掛かると思ったから。

あるワンフロアに倒れるサラリーマンの方々。

男性として不能になる一步手前のところだったが、大丈夫だろうか。もしかしたら駄目になった奴もいるかも知れないが生憎、俺は治癒

系得意じゃないので、
スマンとしか言いようがないが匿名で救急要請はした。
あのまま放置していたら完全に不能になってたのだから、まあ良かったでしょう。

しかし、柳洞寺のサーヴァントは男が嫌いなのか？

えげつないんだよな、……やり方が。

命は取らんが玉は取る。っていうエグイやり方だ。

アーチャーはまあ英雄らしくないとは言え英雄っちゃ英雄だな雰囲気的に。

だが、これをやったキャスター（仮）はどちらかというとなんな存在に思える。

英雄と大量殺人者は紙一重だが、上手くいえないが何か違うのだ。

取り留めのない思考に陥りながらも愛車であるバイクに跨る。

その間にもレスキュー隊が到着したのか、慌しく幾人かがビルに入っていく。

何度かセルを回しエンジンをかけるが、なかなか掛からない。

ようやく掛かった…。

と思ったら冬場はアイドリングが暫く安定しないんだよ。

「いけるか？」

タンクを軽く叩き、ギアを入れる。

前世でも馬に乗るときは軽く首筋を叩いてから走らせていたが、その癖が抜けていない。

空っ風を切りながら衛宮邸を目指す。

西に日は沈み、夜が始まる。

今日の晩飯は何だろうか？

無理やりにも思考を軽いほうに傾けて、いつもと違う道まで通って来たっていつもの……。。

最近、厄介ごとに巻き込まれている。

人払いの結界ですが、突破しちまったぜ。

単車は急に止まれないって結界張ったやつは分ってないね。

「さてさて、何が出るやら」

バイクを止めて、括り付けてあった日用品の中から、あるモノを取り出す。

こんな時に役立つのが、

そう、今日買った覆面もとい被り物。

こんな結界張ったのはおそらくサーヴァントだろう。ならば面が割れないようにして、挑もうじゃないか。

まさに『備えあれば憂いなし』である。

月が雲に隠れ夜の闇が支配する。

ただ、文明が進み特に平和なこの国には夜を照らす光源が溢れている。

よほどの田舎に行かない限り外灯のない街は少ないだろう。

人気がない通りを歩く、馬面の男。

虚ろな瞳、中途半端に開かれた口から覗く歯。

だが、どこかコミカルさを失わない表情は非常にシュールな光景である。

この他にも普通のレスラーがする覆面や黄金に輝くパンチパーマも
とい螺髪（むすぶ）の

大仏の面もあったが、あえて馬面を選んだのは彼の気分、他なら
ない。

そして馬面男と一人の少女は鉢合わせる。

何かから逃げ馬面男に向かってくる穂群原学園の女子生徒。

が、急に立ち止まった。

部活が終わった後、同じ部活の男子生徒に呼び出され、癩癩を起す

ソレ。

それだけなら、いつもの事だった。

今回は違った、どこからともなく現れたヨクワカラナイモノに追われ、怯え、逃げた。

そして今度は目の前に顔が馬で体が人間の男が現れたのだ。

普段ならば、それが被り物だと気付いただろうが、今は違う。

そんな余裕彼女にはなかった。

前門のライダー、後門の馬

美綴綾子、究極の2択である。

ナイトメア(前書き)

ライ子さん若干、勘違い。

ナイトメア

月が見え隠れする薄暗い夜の中。

街頭の下、見知った顔が俺を見て止まった。

その後ろに何か得体の知れないものも近付いて来ている。

十中八九、サーヴァントであろう、その気配。

「追いかけてこは終わりかい？ 美綴」

と、こちらも知った声が聞こえてきた。

間違いないワカメだ。

ってことはアイツがマスターか？

間桐の家は落ちぶれたって遠坂は言っていた。

事実、ワカメからは魔術師らしき魔力を感じた事ないのだが、

相当うまく隠蔽していたのか……。

それは無い。何度、俺がワカメを襲ったと思っている。

毎月、2度は未遂も含めてだが襲っているのだ。

分らないはずなど無い。

ふくむ。腕を組んで考えるが全く判らない。

「……………」

何故か、こちらと後ろを忙しなく視線を動かす美綴。

「どうしたんだい？　いつもの強気的美綴は」

下種な笑い声を響かせ、段々と近付いてくるワカメの声。

俺を気にしながら美綴がジリジリと後退してくる。

そんなに俺が気になるのか？　いや今はそれより……、

これは美綴がワカメに襲われているのか？

…違うな。ワカメがサーヴァントを使って襲っていると言うほうが正しいな。

「クツクツク、僕の周りにいる奴等はどういつもこいつも生意気なんだよね。そうやっていつも僕を見て怯えていれ…ば…い…い…？」

ようやく姿を現したワカメ。その手には魔道書らしきもの。

そのすぐ傍らに長身でナイスボディの長くて柔らかそうな薄いパープルヘアーの美女。

その両目は眼帯で閉じられているが、間違いなく美女。

お前を見て怯えてるんじゃないかと、お前の連れている美女を見て、怯えているのだ。

うむ、やはりサーヴァントのようだ。

しかしだ、

くっそ！ ワカメの癖に！ ワカメの癖に！

これは私刑執行確定ですね。

奴の罪状は以下の通りである！

一、衛宮以上にへっぴばこなのに別嬪さんのサーヴァントを呼び出した事。

一、美少女を襲っている事。

一、やり方が小物染みている事。

一、女子にモテる事。

一、ワカメな事。

一、ワカメ嫌いだから。

「…なん…だ、お前…は？」

「慎二、気をつけてください。様子がおかしい」

私刑にするのはいいのだが、美綴をどうするかだな。
顔を見られたからには……。

……そうだった俺今、馬だった。通りで俺を見て警戒するし、視
界も悪いわけだ。

そりゃ、得体の知れないモノから逃げて来て、その先に顔が馬の人
間がいたら恐怖だわ。

俺が普通の人間なら軽くトラウマになっているかも知れない、馬だ
けに。

「当たり前だろそんな事！ 早く片付けなよライダー」

確かに俺の様子がおかしいのは認めよう外観的に。

だが、何とも情けない奴だ。

苛立たしげに俺と美綴を睨むワカメ。

自分じゃ手を出す勇氣も無いくせに、プライドだけは新都の高層ビ
ル並みに高いときてる。

正面から遣り合ったら美綴にすら負けるなコイツ。

だからといって人間を超越したサーヴァントを使って襲うとは、玉
ついてんのか？

さてと、じゃあやりますか。

悪いがちょっと眠っててくれよ美綴。

彼女にそつと近付き、肩を抱く。

「ひっ！」

小さな悲鳴を上げられ、

傷付いたがグツと堪えて俺の魔力で精神に干渉して夢の世界へ旅立つてもらった。

ゆっくりと彼女を道脇に下ろし、着ていたジャンパーをかける。

紳士的な俺に乾杯。

そうだ、帰ったらネコさんから貰ったウイスキーを飲もう。

「チツ！ 人の獲物を横取りかい卑しいね」

どうやら俺が美綴に何かやったと思ったらしい。
お前と一緒にしないで欲しいな。

さてと、ワカメ覚悟はいいな、

「悪夢の始まり、ぞ。∴ Ouvrez」

馬男が飛んだ。

それは一瞬にして起こった。

己が仮初のマスターの姿が隣から消え、そこに居た馬面から不可視な何か振るわれて
自分が攻撃されたと感じいたのは思考に遅れてやって来た強烈な衝
撃の後だった。

侮った訳ではない。

ただ、人間だと思っただけ。

少なくとも、それがサーヴァントだったとは思いつかなかった。

「グッ！ セイバーのサーヴァントだったのですか…」

それもその筈、サーヴァントはサーヴァントの気配が分る。

この馬面男からはその気配を今の今まで感じられなかったのだから、
もっとも馬面の男は人間なのだが、ライダーは知る由もなかった。

吹き飛ばされ、どうにか体制を整えたライダーは、
近くで気絶していたワカメもとい慎二を抱え、逃げることに徹する
事になった。

だが、全く距離が離れない。どんどん間が詰められている。
時折、相手から放たれる風の塊。

それが馬面剣士が放つ魔術であり対魔力のあるライダーには効果が

無いが、
抱えている慎二に一度でも当たれば肢体は千切れるほどの威力があるもの。
避けるか、自分の体にだけ当たるように仕向けなければならぬ。
ただ、体に当てるのはいいが慎二に当たる可能性が出てくる為、
避けるの選択肢しか残されない。

それを理解したうえで馬面剣士は行っているように思える。

まるで、狩りを楽しんでいるように。

見かけによらず狡猾で残虐な得体の知れない剣士。

どこの英雄か分らないが、ライダーは逃げられないことを悟る。

であれば、少しでも自分が有利な場所へ

「追いかけてこは終わりかい？」

意外と若い男の声で実に楽しそうな雰囲気帯びている。

それはライダーにとっては寒気がするものだった。

「アハ・イシユケ」

ライダーが呟いた言葉。それはアイルランドに伝わる馬の魔物の名前であった。

「ほう、わかるか？」

そう呟き、馬面男は無骨な剣を構えた。

調子乗ってセイバーの不可視の剣をやってみたら出来たが、魔力がガンガン減っていくので途中で解除して、風弾にして何度も攻撃しているのに紙一重でかわされている。

ちつくしょう！ 当たらない！ 馬の被り物が邪魔すぎる。

まあ徐々に近付いているので良しとするか。

このまま行けば、多分学園のあたりで追いつけるハズ。

お、止まった。

学園の裏にある林あたりだ。

慎一も意識が戻ったようで血相変えてライダーの後方に離れていく。

……その足取りは酔っ払いのようだが。

確実に内臓にダメージと、肋骨の何本かは持って逝ったと思うが、

ふむ、やはり俺も甘くなっているな。前世なら最初の一撃で確実に

仕留めていた。

得物じゃなくて、蹴りでそれも手加減して放っているあたり、そう思わざる得ない。

一応、同級生だし、桜嬢の兄貴だし。とか色々言い訳を考えている辺りで、

あ、ワカメがこけた。プルプルしていて笑える。

「追いかけてこは終わりかい？」

皮肉を込めて慎二と同じセリフを吐いたが冷静に考えると、俺は今ものすごく間抜けな姿に見えるのではないだろうか？

ジーンズにパーカー、手には両手剣で顔は馬。

どうなんだろうか……。

「アハ、いい趣味ね」

……。

俺の心境読み取らないで欲しい。

「ほう、わかるか？」

そうだろ！ いい趣味だろ！

精一杯の強がりを書いてやっただけチクシヨ！

もういい、かかってきやがれ！

ジャラリジャラリと鎖が四方八方に伸び、木々の間から飛んでくる釘。

鎖鎌ならぬクサリダガーとでも言おうか。

そして地を這うような姿勢から飛び込んでくる眼帯美女。

一撃離脱。

ボディコンのような服を着ているというのに全く下着が見えないというの
は
どんな魔法か？

「まるで、獣だな」

しかし、やりづらい。

何度目かになる攻撃を弾き、また様子見に入ったようだ。

強さ自体はバーサーカーと比較するのはアレだがさほど脅威を感じない。

いや、一撃一撃が非常に重たいのだが、正攻法で攻めてこないあたり、

ライダー故に何かに乗ってナンボなのだろう。

だが、宝具を使われたら厄介だ。

やはりワカメを仕留める他無いか。

「おかしいですね。本当に貴方は魔獣ですか」

え、何？ どういう意味だ？

「…なら、床の上で試してみるかね？ 俺の魔獣振りが堪能できるが」

下半身的なことの意味なら、若さゆえに滾っていますが。

「遠慮しますね。目が腐ってしまいそうですもの」

そんなに醜い体じゃないわい！ 大体、眼帯で目隠しているのに…。

もしや、

試してみるか。

「そうか、確かに俺も石に変えられたくは無い。それとも愛人風情が純情を語るのか？」

「 ギリ」

ここまで聞こえる歯が軋む音。

一気に殺気が膨れ上がった、相当ご立腹の様子。
だが、次の攻撃をやり過ぎ、ワカメを狙う機会は出来た。
まだ遠くには逃げられていないハズ。

ワカメを逃がす為にライダーは俺を足止めしたいというのもあるの
だろう。

今の挑発でその意識薄れた筈。

「おお、女が怒ると怖いな」

マジで怖いのですが…。

「ここまで怒り狂っておるのによもや逃げまいな？ J e l l a
j o u t e V e n t」

だけどダメ押しさせてもらう。再び剣に風を纏わす。

「その目玉抉り出してさしあげましょう！」

その言葉と共に幾重にも鎖が俺を拘束せんと襲い掛かる。
そして再び、ライダーが地を這う姿勢でやってくる。

「振り子つ打法ー！ー！ー！」

「なっ！？」

剣ごとフルスイング！

風の魔術だけでは効かないかもしれないが、バーサーカーすら斬つた剣だぜ。

数秒、意識を逸らす事ができればいい。

真っ向勝負などせんわ！ 狙いはあくまでワカメである。

「Ouvrir complètement」

全力で自身にブーストをかけてワカメを追う！

ライダーを置き去りにし、ワカメを射程に捕らえる。

「Brûlez tout a fait」

右手に炎を纏わせ、正拳突き！

ワカメごと灰にするつもりだったが、

ワカメが投げ出した魔道書らしきものに当たり、燃え上がる。

「ひい！ やだ！ 殺さないで！」

逃げていくワカメ、死ぬ覚悟も出来ていないのか。

追う気にもなれん。大体、お前の家知ってるから俺。

後方に気配を感じれば、足元から徐々に霧になっていくライダー、

これは消滅していつていると考えていいだろう。

「先程の言葉、失言であった。許せ美しき女神よ」

「……………」

無言で消え去るライダー。

消える寸前に見たのは微笑であったと思いたい。

何だかスッキリしない終わり方だ。

しかし、何故だ？ 何故ライダーは消滅したのか。ワカメは仕留め損ねた。

そもそも、アイツが何故にマスターに？

確率で行けば魔術師の妹のほうが高いはず。

「……………」

足元には焼けて灰になったワカメが投げ出した残骸。

これが燃え、ライダーが消滅したとなると……………、

導き出される答えは、

「…令呪か」

体のどこかに刺青が出来るのではなかったのか？

これは帰って話し合いが必要だな。

しかし、その場合に衛宮に話しているものかどうか。

アイツの場合、友達だなんだで……………、

「…あ、やべ」

美綴、放置したまんまだ。

道端に寝るクラスメイト。

普段の勝気な表情とは違い寝顔は穏やかだな。

さてと、記憶を消すか。

人差し指を美綴の額に当てる。

とりあえず、2時間くらい前まででいいか。

「おおい、起きろ美綴。こんなところで寝てると風邪引くぞ」

こんなところで寝かせたのは俺なのだが、肩を揺らす。

「…ん、…んっ？」

起きたか？

「……………」

ゆっくりと瞼を開く美綴。

「おはようさん。立てるか？」

「なっ!？」

な？

「変態っ!!!」

「っはっ!!!」

いきなりボディブロー!？

「…な、ぜに…?」

「あれ、あたしは何でこんなところに？ まさか…」

自分の着衣を確認しだす美綴。そのまま、

「痛いっ! やめ、やめてっ!」

関節決められる。腕はそっちに曲がらない!

「黙りな! 未遂だったようだけど、その顔さっさとみせな!」

あ、そうか馬面してたね俺。って何が未遂だ!？

「……月見里？」

「…そうだ、月見里だ。いいから関節外せ、いや外してください」

「見損なつたよ。アンタがこんな事するなんて……」

「いやいや、待てい！ 己は何か決定的に勘違いしている！」

「じゃあなんだい！ この被り物は！」

ギリギリとさらに極まっっていく関節技。

「…ファ、ファックションです！」

「一本逝つとくかい？」

「いくなー！！ てか、何故俺がお前を襲つたような流れで話してんだ！ 大体な、俺なら正面から口説いているし、お前が武術を修めてるのを知ってるんだ、襲おうなんて思わんわ」

「む、そう言われるとそんな気もするね……、じゃあ何で、あたしはこんな所で寝てたんだ？」

「知るか！ こつちが聞きたいわ！ 酒でも飲んでんのか？」

いや、俺がやりましたが。

「あれ、頭痛い」

額を押さえ、関節技が抜けた。

「おい、大丈夫か？」

やっべ、本気で思い出そうとしてるな。
えっと何か無いか？ 何か……ええい、ままよ！

「ちよつ、えつ！？」

思わず抱き寄せてしまった。反省してる。

「送ってやる。乗れ」

そのままバイクの後ろに乗せ、俺の被ってたメットを被せる

「ちゃんと捕まっているよ？」

「え、あ、うん」

後ろに乗せた美綴の双丘の感触を感じながらバイクを走らせた。

…本当に反省してる。

ナイトメア（後書き）

戦闘中、ずっと馬面。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2296z/>

Fate/Je suis inconnu

2012年1月12日23時51分発行